

افريقية وذلك في سنة تسع وثمانين للهجرة وقال الح
ابو عبد الله الحميدى في كتاب جذوة المقتبس ان موسى
بن نصير تولى افريقية والمغرب سنة سبع وسبعين
رسله اليها فلما قدمها ومعه جماعة من الجنود بلغه
بأطراف البلاد جماعة خارجين عن الطاعة فوجه
الله فاتاه بمائة الف رأس من
الى جهة اخرى

アラビア語のノート

古典アラビア語の授業ノート

Ⅱ

マイダーニーの『ことわざ集成』より

<http://arabiago.jimdo.com>

アラビア語のノート 古典アラビア語の授業ノート II

目次

1. シャンファラーより速く走る	3
2. さまざまなことわざ 1	7
3. 棒は小さな棒から	1 2
4. さまざまなことわざ 2	1 9
5. アシュアブより欲ばりだ	2 4
6. さまざまなことわざ 3	2 7
7. 一番年下が一番悪い	3 4
8. サマウアルより信義を守る	3 7
9. さまざまなことわざ 4	3 9
10. バスースより不吉だ	4 3

ずっと前の古典アラビア語講読の授業のノートをもとに作ったアラビア語と日本語の対訳です。アラビア語には母音符号をつけています。

先生の講義内容は正しかったはずですが、受講者の不注意のため、このノートにはいくつか間違いもあるかと思えます。ご容赦下さい。

この冊子は同タイトルのWebページに、順次掲載しているものをまとめたものです。

お気づきの点、ご質問等がございましたら、<http://arabiago.jimdo.com> のページからご連絡をお願いします。

このIIではالميدانى 마이ダーニー(d.1124)のمجمع الأمثال 『ことわざ集成』からのテキストを集めました。

ことわざの由来となった物語が述べられた長いものから、短い解説が付けられただけのものなど、いろいろです。

ここに挙げたテキストは、そのことわざの解説全文ではなく、一部のみの抜粋もあります。

また、ことわざの由来等については、マイダーニーがここに挙げたもの以外の説もあります。

1. シャンファラーより速く走る

أَعْدَى مِنَ الشَّنْفَرَى

هَذَا مِنَ الْعَدُوِّ وَمِنْ حَدِيثِهِ فِيمَا ذَكَرَ أَبُو
عَمْرٍو الشَّيْبَانِيُّ أَنَّهُ خَرَجَ هُوَ وَتَأَبَّطَ شَرًّا

وَعَمْرُو بْنُ بَرَّاقٍ فَأَغَارُوا عَلَى بَجِيلَةَ

فَوَجَدُوا لَهُمْ رَصَدًا عَلَى الْمَاءِ

فَلَمَّا مَالُوا لَهُ فِي جَوْفِ اللَّيْلِ قَالَ لَهُمَا

تَأَبَّطَ شَرًّا إِنَّ بِالْمَاءِ رَصَدًا وَإِنِّي لِأَسْمَعُ

وَجِيبَ قُلُوبِ الْقَوْمِ

فَقَالَا مَا نَسْمَعُ شَيْئًا وَمَا هُوَ إِلَّا قَلْبُكَ

يَجِبُ فَوَضَعَ أَيْدِيَهُمَا عَلَى قَلْبِهِ

وَقَالَ وَاللَّهِ مَا يَجِبُ وَمَا كَانَ وَجَابًا

قَالُوا فَلَا بُدَّ لَنَا مِنْ وُرُودِ الْمَاءِ

فَخَرَجَ الشَّنْفَرَى فَلَمَّا رَأَاهُ الرَّصَدُ عَرَفُوهُ

「シャンファラーより速く走る」

これ(أعدى)はعدو「走る」という語から来ている。彼についての話の中にアブー・アムル・シャイバーニーが述べる場所に従えば次のような話がある。彼とタアツバタ・シャツランとアムル・ブン・バッラクが出かけてバジーラ部族を襲撃した

ところが、水場に見張り達がいるのを見つけた。

真夜中に彼らがその(水場の)ほうへ曲がって行ったとき、2人にタアツバタ・シャツランが言った。水のところに見張りがいる、私には連中の

心臓の動悸が聞こえる。

2人は言った。我々には何も聞こえない、お前の心臓の動悸にほかならないだろう。そこで彼は2人の手を自分の心臓の上に置いて言った。

神かけて、それは動悸していない、動悸の激しいものではない。

彼らは言った。我々はどうしても水のところへ下りて行かねばならない。

そこでシャンファラーが出て行った。見張り達は彼を見て誰だかわかったが、

فَتَرَكَوهُ حَتَّى شَرِبَ مِنَ الْمَاءِ وَرَجَعَ إِلَى
أَصْحَابِهِ فَقَالَ وَاللَّهِ مَا بِالْمَاءِ أَحَدٌ وَلَقَدْ

放っておいたので、彼は水を飲んで仲間達のところへ戻って言った。神かけて、水のところには誰もいない、

شَرِبْتُ مِنَ الْحَوْضِ

私は水溜から水を飲んだ。

فَقَالَ تَأَبَّطُ شَرًّا بَلَىٰ وَلَكِنَّ الْقَوْمَ لَا

タアツバタ・シャツランは言った。いや、連中はお前が

يُرِيدُونَكَ إِنَّمَا يُرِيدُونَنِي

欲しいのではなく、私が欲しいのだ。

ثُمَّ ذَهَبَ ابْنُ بَرَّاقٍ فَشَرِبَ وَرَجَعَ وَلَمْ

それからイブン・バッラークが行って飲み、戻ってきたが、

يَتَعَرَّضُوا لَهُ

彼らは姿を現さなかった。

فَقَالَ تَأَبَّطُ شَرًّا لِلشَّنْفَرَىٰ إِذَا أَنَا كَرَعْتُ

タアツバタ・シャツランはシャンファラーに言った。私が

فِي الْحَوْضِ فَإِنَّ الْقَوْمَ سَيَشُدُّونَ عَلَيَّ

水溜から水をすすったら、連中は私に襲いかかり、私を

فَيَأْسِرُونَنِي فَأَذْهَبُ كَأَنَّكَ تَهْرُبُ ثُمَّ كُنْ

捕虜にするだろう、そうしたら、逃げるかのように去れ、

فِي أَصْلِ ذَلِكَ الْقَرْنِ

そして、あの小山のふもとにいるのだ。

فَإِذَا سَمِعْتَنِي أَقُولُ خُذُوا خُذُوا فَتَعَالَ

私が捕えよ、捕えよ、と言うのが聞こえたら、来てくれ、

فَأَطْلِقْنِي

そして私を解放してくれ。

وَقَالَ لِابْنِ بَرَّاقٍ إِنِّي سَأْمُرُكَ أَنْ تَسْتَأْسِرَ

そしてイブン・バッラークに言った。連中の捕虜になるよう申し出よと、

لِلْقَوْمِ وَلَا تَنَّا عَنْهُمْ وَلَا تُمَكِّنْهُمْ مِنْ نَفْسِكَ

ثُمَّ مَرَّ تَأْبَطُ شَرًّا حَتَّى وَرَدَ الْمَاءَ

فَحِينَ كَرَعَ فِي الْحَوْضِ شَدُّوا عَلَيْهِ

فَأَخَذُوهُ وَكَتَفُوهُ بِوَتْرٍ وَطَارَ الشَّنْفَرَى

وَأَتَى حَيْثُ أَمَرَهُ وَأَنْجَازَ ابْنِ بَرَّاقٍ حَيْثُ

يَرُونَهُ

فَقَالَ تَأْبَطُ شَرًّا يَا مَعْشَرَ بَجِيلَةَ هَلْ لَكُمْ

فِي خَيْرٍ أَنْ تُيَاسِرُونَا فِي الْفِدَاءِ

وَيَسْتَأْسِرَ لَكُمْ ابْنُ بَرَّاقٍ

قَالُوا نَعَمْ

فَقَالَ وَيْلَكَ يَا ابْنَ بَرَّاقٍ أَمَا الشَّنْفَرَى

فَقَدْ طَارَ وَهُوَ يَصْطَلِي بِنَارِ بَنِي فُلَانٍ

وَقَدْ عَلِمْتَ مَا بَيْنَنَا وَبَيْنَ أَهْلِكَ

فَهَلْ لَكَ أَنْ تَسْتَأْسِرَ وَيُيَاسِرُونَا فِي الْفِدَاءِ

私がお前に命じるが、彼らから遠ざからず、しかし彼らに身を任せるな。

それからタアツバタ・シャツランは行って、水のところへ下りた。

彼が水溜から水をすすったとき、彼らは彼に襲いかかり、

彼を捕えて弓の弦で後ろ手に縛った。シャンファラーは飛んで逃げ、

彼が命じた場所に来た。イブン・バッラークは彼らに

見えるところまで逃げた。

タアツバタ・シャツランは言った。バジーラの衆よ、我々の身代金を

安くしてくれる代わりに、イブン・バッラークが捕虜になると申し出るほうが

あなたがたにとって良いのではないか。

彼らは言った。そうだな。

彼は言った。罰当たりめ、イブン・バッラークよ、シャンファラーは

飛んで逃げて、どこかの部族の火にぬくぬくとあたっているだろう、

お前は我々とお前の家族の間柄を知っている。

お前が

捕虜になると申し出て、彼らに我々の身代金を安くしてもらうことをどう思うか。

قَالَ لَا وَاللَّهِ حَتَّى أُرْوَى نَفْسِي شَوْطًا
أَوْ شَوْطَيْنِ

彼は言った。神かけて、いやだ、一走りか二走りして

試してみるまでは。

فَجَعَلَ يَسْتَنُّ نَحْوَ الْجَبَلِ وَيَرْجِعُ حَتَّى

そして山のほうへ走ったり戻ったりし始め、やがて

إِذَا رَأَوْا أَنَّهُ أَعْيَا طَمِعُوا فِيهِ فَاتَّبَعُوهُ

彼らは彼が疲れたとみると、彼を捕えようと欲を出し、後を追った。

وَنَادَى تَأَبَّطْ شَرًّا خُذُوا خُذُوا

タアツバタ・シャツランは叫んだ。捕えよ、捕えよ。

فَخَالَفَ الشَّنْفَرَى إِلَى تَأَبَّطْ شَرًّا فَقَطَعَ

すると、入れ違いにシャンファラーがタアツバタ・シャツランのところにきて

وَتَأَقَهُ

縄を断ち切った。

فَلَمَّا رَأَهُ ابْنُ بَرَّاقٍ وَقَدْ خَرَجَ مِنْ وَتَاقِهِ

イブン・バツラークは彼が縄から脱したのを見ると、

مَالَ إِلَى عِنْدِهِ

彼と落ち合った。

فَنَادَاهُمْ تَأَبَّطْ شَرًّا يَا مَعْشَرَ بَجِيلَةَ

タアツバタ・シャツランは彼らに叫んだ。バジーラの衆よ、

أَأَعْجَبَكُمْ عَدُوُّ ابْنِ بَرَّاقٍ أَمَا وَاللَّهِ

イブン・バツラークの走りに感心したか、神かけて

لَأَعْدُونَ لَكُمْ عَدُوًّا يُنْسِيكُمْ عَدُوَّهُ

私は彼の走りを忘れさせるような走り方で走ってやろう。

ثُمَّ أَحْضَرُوا ثَلَاثَتَهُمْ فَانْجَبُوا

そして彼ら3人は疾走し、逃れた。

وَفِي ذَلِكَ يَقُولُ تَأَبَّطْ شَرًّا

それについてタアツバタ・シャツランが詩を詠んでいる。

لَيْلَةَ صَاحُوا وَأَغْرَوْا بِي سِرَاعَهُمْ

その夜彼らは叫び、良く走る者達を私にけしかけた

بِالْعَيْكَتَيْنِ لَدَى مَعْدَى ابْنِ بَرَّاقِ

イブン・バッラクの走り場にあるアイカの双子山で

كَأَنَّمَا حَتَّحْتُوا حُصَا قَوَادِمُهُ

あたかも風切羽の薄いもの(=ダチョウ)や、母カモシカをけしかけるように

أَوْ أُمَّ خِشْفٍ بِيْذِي شَتِّ وَطُبَّاقِ

シャツスとトゥツバーク(どちらも植物の名)の茂る山で

لَا شَيْءَ أَسْرَعُ مِنِّي غَيْرَ ذِي عُدْرٍ

私より速やかなるものはない、たてがみを持つもの(=馬)や

أَوْ ذِي جَنَاحٍ بِجَنْبِ الرَّيْدِ خَفَّاقِ

山ぎわで羽ばたく翼を持つもの(=ワシ)を除いては

فَكُلُّهُوَ هَوْلَاءِ الثَّلَاثَةِ كَانُوا عَدَائِينَ وَلَمْ يَسِرْ

この3人は皆、良く走る者であったが、ことわざとしては

الْمَثَلُ إِلَّا بِالشَّنْفَرِي

シャンファラーしか用いられなかった。

2. さまざまなことわざ1

لَا تَكُنْ حُلُومًا فَتُسْتَرَطَ وَلَا مَرًّا فَتُغْفَى

「甘くなるな、さもないと飲み込まれる、苦くなるなさもないと吐き出される」

الْأَسْتِرَاطُ الْأَبْتِلَاعُ وَالْإِعْقَاءُ أَنْ تَشْتَدَّ

استراط は「飲み込むこと」である。إعقاء は「ものの苦

مَرَارَةُ الشَّيْءِ حَتَّى تُلْفِظَ لِمَرَارَتِهِ

さが、苦さのため吐き出されるほど強いこと」である。

وَبَعْضُهُمْ يَزْوِي فَتُعْقَى بِوِزْنٍ فَتُسْتَرْطُ
وَالصَّوَابُ كَسْرُ الْقَافِ يُقَالُ أُعْقَى
الشَّيْءُ

ある人は **افسُتَرتَط** にならって
(受動態で) **فُعُقِيَ** と言うが

正しくは **ق** をカスラ(i音)
で読み、

أُعْقَى الشَّيْءُ と言う¹。

وَالْمَعْنَى لَا تَتَجَاوَزِ الْحَدَّ فِي الْمَرَارَةِ
فَتُرْمَى وَلَا فِي الْحَلَاءِ فَتُبْتَلَعُ
أَيُّ كُنْ مُتَوَسِّطًا فِي الْحَالَيْنِ

ことわざの意味は、「苦さ
の限界を超えるな、

さもないと捨てられる、甘さ
の限界を超えるな、さもない
と飲み込まれる

すなわち、二つの状態の
中間であれ」

1 IV形の能動態で「ものが苦すぎる」という意味になる

لَا آتِيكَ مَا دَامَ السَّعْدَانُ مُسْتَلْقِيًا
قِيلَ لِأَعْرَبِيٍّ كَرِهَ الْبَادِيَةَ
هَلْ لَكَ فِي الْبَادِيَةِ
قَالَ أَمَّا مَا دَامَ السَّعْدَانُ مُسْتَلْقِيًا فَلَا
قَالُوا وَكَذَا يَنْبُتُ السَّعْدَانُ

「サアダーンが横ばいに生
えている限り、私はあなた
のところには来ない」
沙漠を嫌ったあるベドウィ
ンに誰かが次のように言っ
た。

あなたは沙漠をどう思う
か。

彼は言った。サアダーン
(植物の名)が横ばいに生
えている限り、嫌だ。
人々が言うには、サアダー
ンはこのように生えるもの
である。

لَا تَنْهَ 1 عَنْ خُلُقٍ وَتَأْتِي 2 مِثْلَهُ

「自分で同じようなことをしながら人の癖を禁じるな」

يُنْشَدُ فِي هَذَا الْمَعْنَى

この意味で詩が詠まれている。

إِذَا عِبْتَ أَمْرًا فَلَا تَأْتِهِ

あることを非難するなら同じことを行な

فَذُو اللَّبِّ مُجْتَنِبٌ مَا يَعْيبُ

分別ある者は自分が非難するものを避ける

1 نَهَى の2人称男性要求法

2 同時性のوと接続法

هَرِقُ 1 عَلَى جَمْرِكَ مَاءً

「あなたの炭火に水を注げ」

يُضْرَبُ لِلْغَضَبَانِ أَيِ أَصْبَبُ مَاءً عَلَى

怒っている人に対して用いられる。すなわち

نَارِ غَضَبِكَ

「あなたの怒りの火に水を注げ」

1 完了形 هَرَأَقُ という形の動詞 (4形の動詞 أَرَأَقُ と同じ意味) 未完了形は يُهْرِيقُ となり命令形がこの形

أَطْعِمْ أَخَاكَ مِنْ عَقَنْقَلِ الضَّبِّ 1

「あなたの兄弟に トカゲの胃袋にあるものを食べさせよ

إِنَّكَ إِنْ تَمَنَعْتَ أَخَاكَ يَغْضَبُ

あなたがそれを拒むなら彼は怒るだろう」

عَقَنْقَلُ الضَّبِّ كَرِشُهُ وَهُوَ مَعِيَ مِنْ

عقنقل الضب とはトカゲの胃のこと、消化器官の一つ、

أَمْعَائِهِ فِيهِ جَمِيعُ مَا يَأْكُلُهُ
يُضْرَبُ مَثَلًا فِي الْمُوَاسَاةِ

その中に食べたものすべてがある。

慰めに関してことわざとして用いられる。(意味がはっきりしませんが、諸説あるようです)

1 本来は الضَّبُّ であるが韻を踏ませるため重子音を省略している

فَلِمَ رِبَضَ الْعَيْرِ إِذْنُ

「それではなぜ、野ロバが横たわったのか」

قَالَ أَمْرُؤُ الْقَيْسِ لَمَّا أَلْبَسَهُ قَيْصَرُ

それを言ったのはイムルウ・ル・カイスで、ビザンツ皇帝が

الْتِيَابَ الْمَسْمُومَةَ وَخَرَجَ مِنْ عِنْدِهِ

彼に毒を塗った服を着せ、彼が皇帝のもとから出て

وَتَلَقَّاهُ عَيْرٌ

野ロバと会ったときである。

فَرِبَضَ فَتَفَاعَلَ أَمْرُؤُ الْقَيْسِ

そして野ロバが横たわり、イムルウ・ル・カイスは兆しを感じた。

فَقِيلَ لَا بَأْسَ عَلَيْكَ

誰かが彼に言った。心配なさるな。

قَالَ فَلِمَ رِبَضَ الْعَيْرِ إِذْنُ أَنَا مَيِّتٌ

彼は言った。それではなぜ、野ロバが横たわったのか。私は死ぬのだ。

يُضْرَبُ لِلشَّيْءِ فِيهِ عَلَامَةٌ تَدُلُّ عَلَى

これはあなたに言われたこととは違うものを示す印が

غَيْرِ مَا يُقَالُ لَكَ

あることについて用いられる。

لِكُلِّ عُودٍ عَصَارَةٌ

「どの木にも汁がある」

الْعُصَارَةُ مَا يَخْرُجُ مِنَ الشَّيْءِ إِذَا عَصِرَ

عصرة は絞られたときに、物から出るものである。

إِنْ حُلُوًّا فَحُلُوًّا وَإِنْ مُرًّا فَمُرًّا

もしその物が甘ければ絞ったものも甘く、苦ければ苦い。

أَيُّ لِكُلِّ ظَاهِرٍ بَاطِنٌ

すなわち、すべての外側には内側がある。

إِنْ كَانَ الشَّيْءُ حُلُوًّا فَمَا يَخْرُجُ مِنْهُ حُلُوًّا¹ と解釈される

هَلْ يَخْفَى عَلَى النَّاسِ الْقَمَرُ

「月は人に隠されているだろうか」

يُضْرَبُ لِلْأَمْرِ الْمَشْهُورِ

これは良く知られているものに用いられる。

قَالَ ذُو الرُّمَّةِ

ズー・ルンマは次のように詩を詠んだ。

وَقَدْ بَهَرْتَ فَمَا تَخْفَى عَلَى أَحَدٍ

あなたは輝いた 誰にも隠されていない

إِلَّا عَلَى أَحَدٍ لَا يَعْرِفُ الْقَمَرَا

月を知らない者以外には

مَنْ يَسْمَعُ يَخْلُ

「聞く人はそう思う」

يُقَالُ خَلْتُ إِخَالَ بِالْكَسْرِ وَهُوَ الْأَفْصَحُ

(1人称完了形は)خَلْتُ(未完了形の語頭母音は)カスラでإِخَالَと言われ、それより純粹(なアラビア語)である

وَبَنُو أُسْدٍ يَقُولُونَ أَخَالَ بِالْفَتْحِ
وَهُوَ الْقِيَاسُ

バヌー・アサド部族はファタハ(a音)でأَخَالَと言うが、

それは(アラビア語文法の)規則通りである。

الْمَعْنَى مَنْ يَسْمَعُ أَخْبَارَ النَّاسِ
وَمَعَايِبَهُمْ يَقَعُ فِي نَفْسِهِ عَلَيْهِمُ الْمَكْرُوهُ

ことわざの意味は「人々の噂や非難を聞く者は

彼らに対して不愉快な気持ちが生じる」ということ。

3. 棒は小さな棒から

إِنَّ الْعَصَا مِنَ الْعُصَيَّةِ
قَالَ الْمُفَضَّلُ أَوَّلُ مَنْ قَالَ ذَلِكَ الْأَفْعَى
الْجُرْهُمِيُّ وَذَلِكَ أَنَّ نِزَارًا لَمَّا حَضَرَتْهُ
الْوَفَاةُ جَمَعَ بَنِيهِ مُضَرَ وَإِيَادًا وَرَبِيعَةَ
وَأَنْمَارًا

「棒は小さな棒から」

ムファッダルが言うには、それを最初に言ったのはアフアー(マムシの意)・ジュルフミーであり、それはこうである。ニザールが死に臨んだとき

息子たちのムダル、イヤード、ラビーア、アンマールを

集めた。

فَقَالَ يَا بَنِيَّ هَذِهِ الْقُبَّةُ الْحَمْرَاءُ وَكَانَتْ
مِنْ أَدَمٍ لِمُضَرَ

そして言った。息子達よ、この赤い丸いテントは—
一皮でできていた—

ムダルのものである。

وَهَذَا الْفَرَسُ الْأَذْهَمُ وَالْخِبَاءُ الْأَسْوَدُ

この黒馬と黒いテントは

لرَبِيعَةَ

ラビーアのものである。

وَهَذِهِ الْخَادِمُ وَكَانَتْ شَمَطَاءَ لِإِيَادِ

この下女—白黒まだらの髪だった—はイヤードのものである。

وَهَذِهِ الْبَدْرَةُ وَالْمَجْلِسُ لِأَنْمَارٍ يَجْلِسُ فِيهِ

この財布と部屋はアンマールのも—そこに彼はいつも座っていた—である。

فَإِنْ أَشْكَلَ عَلَيْكُمْ كَيْفَ تَقْتَسِمُونَ فَأْتُوا¹

もし、どのように分配するかが曖昧ならば、アフアー・ジュルフミーの

الْأَفْعَى الْجُرْهُمِيُّ وَمَنْزِلُهُ بِبَنْجَرَانَ

ところへ行け。彼の家はナジュランにあった。

فَتَسَاجَرُوا فِي مِيرَاتِهِ فَتَوَجَّهُوا إِلَى الْأَفْعَى

彼らは遺産について議論した。そして、アフアー・ジュルフミーの

الْجُرْهُمِيُّ

ところへ向かった。

فَبَيْنَمَا هُمْ فِي مَسِيرِهِمْ إِلَيْهِ إِذَا رَأَى مُضْرُ

彼らが彼のところへ行く途中で、突然、ムダルは

أَثَرَ كَلَأٍ قَدْ رُعِيَ

獣に食べられた草の跡を見て

فَقَالَ إِنَّ الْبَعِيرَ الَّذِي رَعَى هَذَا لِأَعْوَرٍ

言った。これを食べたラクダは片目である。

قَالَ رَبِيعَةُ إِنَّهُ لِأَزُورٍ

ラビーアは言った。それは体がゆがんでいる。

قَالَ إِيَادٌ إِنَّهُ لِأَبْتَرٍ

イヤードは言った。それは尾がほとんどない。

قَالَ أَنْمَارٌ إِنَّهُ لِشَرُودٍ²

アンマールは言った。それはものおじする。

فَسَارُوا قَلِيلًا فَإِذَا هُمْ بِرَجُلٍ يُوضِعُ جَمَلَهُ

彼らが少し進むと、ふいにラクダを進ませている男に出会った。

فَسَأَلَهُمْ عَنِ الْبَعِيرِ

彼は彼らにラクダについて尋ねた。

فَقَالَ مُضَرُّ أَهُوَ أَعْوَرُ قَالَ نَعَمْ

ムダルが言った。それは片目か。彼は言った。そうだ。

قَالَ رَبِيعَةُ أَهُوَ أَزْوَرُ قَالَ نَعَمْ

ラビーアが言った。体がゆがんでいるか。彼は言った。そうだ。

قَالَ إِيَادُ أَهُوَ أَبْتَرُ قَالَ نَعَمْ

イヤードが言った。尾がほとんどないか。彼は言った。そうだ。

قَالَ أَنْمَارُ أَهُوَ شَرُودٌ قَالَ نَعَمْ وَهَذِهِ

アンマールが言った。ものおじするか。彼は言った。そうだ、これらは

وَاللَّهِ صِفَةٌ بَعِيرِي فَدُلُونِي عَلَيْهِ

神かけて、私のラクダの特徴だ、その居場所を教えてください。

قَالُوا وَاللَّهِ مَا رَأَيْنَاهُ

彼らは言った。神かけて、私達はそれを見なかった。

قَالَ هَذَا وَاللَّهِ الْكَذِبُ وَتَعَلَّقَ بِهِمْ

彼は言った。これは神かけて嘘だ。そして彼らにすがりつき

وَقَالَ كَيْفَ أَصَدَّقُكُمْ وَأَنْتُمْ تَصِفُونَ

言った。どうしてあなたがたの言うことを信じようか、

بَعِيرِي بِصِفَتِهِ

あなたがたは私のラクダの特徴を述べているのに。

فَسَارُوا حَتَّى قَدِمُوا نَجْرَانَ

彼らは進み、やがてナジュランに着いた。

فَلَمَّا نَزَلُوا نَادَى صَاحِبُ الْبَعِيرِ هَوْلَاءِ

彼らが落ち着くと、ラクダの持ち主は叫んだ。この人達は

أَصْحَابُ جَمَلِي وَصَفُوا لِي صِفَتَهُ ثُمَّ

私のラクダを取って持っている。私のラクダの特徴を述べたのに、

قَالُوا لَمْ نَرَهُ

それを見なかったと言った。

فَاخْتَصَمُوا إِلَى الْأَفْعَى وَهُوَ حَكْمُ الْعَرَبِ

彼らは言い争ってアフア一のところへ来た。彼はアラブの審判者だった。彼は言った。あなたがたはラクダを見もしないのに、どうやって特徴を述べたのかムダルは言った。私はそれが片側の草を食べ片側は残しているのを見て

فَقَالَ الْأَفْعَى كَيْفَ وَصَفْتُمُوهُ وَلَمْ تَرَوْهُ

فَقَالَ مُضَرُّ رَأَيْتُهُ رَعَى جَانِبًا وَتَرَكَ جَانِبًا

それが片目だと知った。

فَعَلِمْتُ أَنَّهُ أَعْوَرُ

قَالَ رَبِيعَةُ رَأَيْتُ إِحْدَى يَدَيْهِ ثَابِتَةً الْأُتْرَ

ラビーアは言った。私はその一方の前足は足跡がはっきりしているのにもう一方は(足跡が)崩れているのを見て、体がゆがんでいると知った。

وَالْأُخْرَى فَاسِدَةً فَعَلِمْتُ أَنَّهُ أَزُورٌ لِأَنَّهُ

一方の足で強く踏むために足跡を崩したのだ。

أَفْسَدَهُ بِشِدَّةِ وَطْئِهِ

قَالَ إِيَادُ عَرَفْتُ أَنَّهُ أَبْتَرُ بِاجْتِمَاعِ بَعْرِهِ

イヤードは言った。私はその糞が集まっているので、尾がほとんどないと知った

وَلَوْ كَانَ ذِيًّا لَا لَمَصَعَ بِهِ

もし尾が大きければ、尾で打ち払っただろうから。

وَقَالَ أَنْمَارُ عَرَفْتُ أَنَّهُ شَرُودٌ لِأَنَّهُ كَانَ

アンマールは言った。私はそれがものおじすると知った。なぜなら

يَرَعَى فِي الْمَكَانِ الْمُلتَفِّ نَبْتُهُ ثُمَّ يَجُوزُهُ

草の繁茂したところで食べ、それからもつと草が少なくて

إِلَى مَكَانٍ أَرْقَ مِنْهُ وَأَخْبَثَ نَبْتًا فَعَلِمْتُ

悪いところへ移って行ったからだ、それでそれが

أَنَّهُ شَرُودٌ

ものおじすると知った。

فَقَالَ لِلرَّجُلِ لَيْسُوا بِأَصْحَابِ بَعِيرِكَ

فَأَطْلُبُهُ

アフアーは男に言った。彼らはあなたのラクダを取っ

ていない、(他を)探せ。

ثُمَّ سَأَلَهُمْ مَنْ أَنْتُمْ فَأَخْبَرُوهُ فَرَحَّبَ بِهِمْ

彼は彼らに、あなたがたは誰かと尋ねた。彼らが告げると彼は彼らを歓迎した。

ثُمَّ أَخْبَرُوهُ بِمَا جَاءَ بِهِمْ

そして彼らは彼になぜ来たかを告げた。

فَقَالَ تَحْتَاجُونَ إِلَيَّ وَأَنْتُمْ كَمَا أَرَى

彼は言った。あなたがたは私が見た通り(賢い)なのに、私を必要とするのか。そして彼らを泊め、彼らのために雌羊を殺し、ブドウ酒を持って来た。

ثُمَّ أَنْزَلَهُمْ فَذَبَحَ لَهُمْ شَاةً وَأَتَاهُمْ بِخَمْرٍ

アフアーは、彼らからは見えないが、彼らの話が聞こえるところで

وَجَلَسَ لَهُمُ الْأَفْعَى حَيْثُ لَا يُرَى وَهُوَ

يَسْمَعُ كَلَامَهُمْ

彼らの様子をうかがって座った。

فَقَالَ رَيْبَعَةٌ لَمْ أَرَ كَالْيَوْمِ لَحْمًا أَطْيَبَ مِنْهُ

ラビーアが言った。私は今日までにこれよりおいしい肉を見たことがないただ、この雌羊が雌犬の乳で養われたのでなければ。

لَوْلَا أَنَّ شَاتَهُ غُذِيَتْ بِلَبَنِ كَلْبَةٍ

فَقَالَ مُضَرُّ لَمْ أَرَ كَالْيَوْمِ خَمْرًا أَطْيَبَ

ムダルが言った。私は今日までにこれよりおいしいブドウ酒を見たことがないただそのブドウの木が墓のそばに生えたのでなければ。

مِنْهُ لَوْلَا أَنَّ حَبَلَتَهَا نَبَتَتْ عَلَى قَبْرِ

فَقَالَ إِيَادٌ لَمْ أَرَ كَالْيَوْمِ رَجُلًا أَسْرَى مِنْهُ

イヤードが言った。私は今日までに彼より高貴な人を見たことがない

لَوْلَا أَنَّهُ لَيْسَ لِأَبِيهِ الَّذِي يُدْعَى لَهُ

ただ彼が、彼の父だと言われている人の子ではないのでなければ。

فَقَالَ أَنْمَارٌ لَمْ أَرْ كَأَلْيَوْمٍ كَلَامًا أَنْفَعَ فِي

アンマールは言った。私は今日までに今の私達の言葉以上に

حَاجَتِنَا مِنْ كَلَامِنَا

私達に役立つ言葉を見たことがない。

وَكَانَ كَلَامُهُمْ بِأُذُنِهِ فَقَالَ مَا هُوَ لِإِلاَّ

彼らの言葉はアフアーの耳に入った。彼は言った。

شَيَاطِينٍ

この人達は悪魔以外の何者でもない。

ثُمَّ دَعَا الْقَهْرَمَانَ فَقَالَ مَا هَذِهِ الْخَمْرُ

そして執事を呼んで言った。このブドウ酒は何か、

وَمَا أَمْرُهَا

その事情はどういうことか。

قَالَ هِيَ مِنْ حَبْلَةٍ غَرَسْتُهَا عَلَى قَبْرِ

執事は言った。それは私があなたの父上の墓の

أَبِيكَ

そばに植えたブドウの木からとりました。

وَقَالَ لِلرَّاعِي مَا أَمْرُ هَذِهِ الشَّاةِ

アフアーは羊飼いに言った。この雌羊の事情はどういうことか。

قَالَ هِيَ عَنَاقٌ أَرْضَعْتُهَا بِلَبَنِ كَلْبَةٍ

羊飼いは言った。それは私が雌犬の乳を飲ませた雌小羊です。

وَذَلِكَ أَنَّ أُمَّهَا كَانَتْ قَدْ مَاتَتْ وَلَمْ تَكُنْ

それは、その母親が死んでしまって、羊の群れには

فِي الْغَنَمِ شَاةٌ وُلِدَتْ غَيْرَهَا

それ以外に子を産んだ雌羊がいなかったからです。

ثُمَّ أَتَى أُمَّهُ فَأَخْبَرْتَهُ أَنَّهَا كَانَتْ تَحْتَ

それからアフアーは自分の母親のところに来た。

مَلِكٍ كَثِيرِ الْمَالِ وَكَانَ لَا يُوَلِّدُ لَهُ

彼女は自分が金持ちの王のもとにいたが彼に子がなかったことを告げた。

قَالَتْ فَخِفْتُ أَنْ يَمُوتَ وَلَا وِلْدَ لَهُ فَيَذْهَبَ

彼女は言った。子がないまま彼が死んで財産がなくなってしまうことを

الْمَلِكُ فَأَمَكَنْتُ مِنْ نَفْسِي ابْنَ عَمِّ لَهُ

私は怖れたので、彼のもとに泊まっていた

كَانَ نَازِلًا عَلَيْهِ

彼の従兄弟に身をまかせたのです。

فَرَجَعَ الْأَفْعَى إِلَيْهِمْ فَقَصَّ الْقَوْمُ عَلَيْهِ

アファアは彼らのもとに戻った。彼らは彼に自分達の

قِصَّتَهُمْ وَأَخْبَرُوهُ بِمَا أَوْصَى بِهِ أَبُوهُمْ

話をし、父親が遺言したことを彼に告げた。

فَقَالَ مَا أَشْبَهَ الْقُبَّةَ الْحَمْرَاءَ مِنْ مَالٍ فَهُوَ

彼は言った。財産のうち、赤い丸テントに似たものは

لِمُضَرَ فَذَهَبَ بِالذَّنَانِيرِ وَالْإِبِلِ الْحُمْرِ

ムダルのものである。それで彼は金貨と赤いラクダを持って行った。

فَسُمِّيَ مُضَرَ الْحَمْرَاءَ لِذَلِكَ

そのため彼は赤のムダルと呼ばれた。

وَأَمَّا صَاحِبُ الْفَرَسِ الْأَذْهَمِ وَالْخِبَاءِ

黒馬と黒いテントの持ち主は、すべての黒いものが

الْأَسْوَدِ فَلَهُ كُلُّ شَيْءٍ أَسْوَدَ فَصَارَتْ

彼のものである。それで黒馬の群れはラビーアのものとなり、

لِرَبِيعَةَ الْخَيْلِ الْأَذْهَمُ فَقِيلَ رَبِيعَةُ الْفَرَسِ

彼は馬のラビーアと言われた。

وَمَا أَشْبَهَ الْخَادِمَ الشَّمْطَاءَ فَهُوَ لِإِيَادِ

白黒まだらの髪の下女に似たものはイヤードのものである。

فَصَارَتْ لَهُ الْمَاشِيَةُ الْبُلْقُ مِنْ الْحَبْلُقِ

それで小さい、貧弱な、まだら色の家畜が彼のもの

وَالنَّقْدِ فَسُمِّيَ إِيَادَ الشَّمْطَاءِ

になり、彼は白黒まだらのイヤードと呼ばれた。

فَقَضَى لِأَنْمَارٍ بِالذَّرَاهِمِ وَبِمَا فَضَلَ

アンマールには銀貨と残り
のものを裁定で割り当て
た。

فَسُمِّيَ أَنْمَارَ الْفَضْلِ

それで彼は残りもののアン
マールと呼ばれた。

فَصَدَرُوا مِنْ عِنْدِهِ عَلَى ذَلِكَ

それを聞いて彼らは彼の
もとから出て行った。

فَقَالَ الْأَفْعَى إِنَّ الْأَعْصَا مِنَ الْعُصْيَةِ

アフアーは言った。(大き
な)棒は小さな棒から。

1 ائْتُوا の命令形(複数)は ائْتِ だが、ف が先行するとこの形になる

4.さまざまなことわざ2

أَتَى عَلَيْهِمْ ذُو أْتَى

「彼らの上に来るべきもの
が来た」

هَذَا مَثَلٌ مِنْ كَلَامِ طَيْبٍ وَذُو فِي لُغَتِهِمْ

これはタイイ部族の言葉か
ら出たことわざで、彼らの
言語で

تَكُونُ بِمَعْنَى الَّذِي

الذی は(関係代名詞の)
の意味であろう。

يَقُولُونَ نَحْنُ ذُو فَعَلْنَا كَذَا أَيُّ نَحْنُ الَّذِينَ

彼らはنحن ذو فعلنا كذا
ち「我々がこれこれをした

فَعَلْنَا كَذَا وَهُوَ ذُو فَعَلَ كَذَا وَهِيَ ذُو

者だ」、هو ذو فعل كذا (彼が
これこれをした者だ)

فَعَلَتْ كَذَا

هي ذو فعلت كذا (彼女がこれこ
れをした者だ)のように言う

قَالَ شَاعِرُهُمْ

彼らの詩人が(ذو の語を
用いて)こう詠んでいる。

فَإِنَّ الْمَاءَ مَاءُ أَبِي وَجَدِّي

水は私の父と私の祖父の水

وَبِئْرِي ذُو حَفْرَتُ وَذُو طَوَيْتُ

私の井戸は私が掘ったもの、私が石で築いたもの

وَمَعْنَى الْمَثَلِ أَتَى عَلَيْهِمُ الَّذِي أَتَى عَلَى

ことわざの意味は「人間に対して来るべきもの、すなわち

الْخَلْقِ يَعْنِي حَوَادِثَ الدَّهْرِ

運命のいろいろな事件が彼らにも来た」

لَا يَعْلَمُ مَا فِي الْخُفِّ إِلَّا اللَّهُ وَالْإِسْكَافُ

「神様と靴屋以外には靴の中に何があるか知らない」

أَصْلُهُ أَنَّ إِسْكَافًا رَمَى كَلْبًا بِخُفِّ فِيهِ

その元は次の通りである。ある靴屋が、中に靴型の

قَالِبٌ فَأَوْجَعَهُ جِدًّا فَجَعَلَ الْكَلْبُ يَصِيحُ

入った靴を犬に投げた。犬は大変痛い思いをし、

وَيَجْزَعُ

叫び、悲しみ始めた。

فَقَالَ لَهُ أَصْحَابُهُ مِنَ الْكِلَابِ أَكُلُ هَذَا

犬の仲間達はその犬に言った。これはすべて

مِنْ خُفِّ

靴なのか。

فَقَالَ لَا يَعْلَمُ مَا فِي الْخُفِّ إِلَّا اللَّهُ

その犬は言った。靴の中に何があるかは神様と

وَالْإِسْكَافُ

靴屋しか知らない。

يُضْرَبُ فِي الْأَمْرِ يَخْفَى عَلَى النَّاطِرِ

これは、見る人に知識や真相が隠されているものに

فِيهِ عِلْمُهُ وَحَقِيقَتُهُ

ついて用いられる。

الْبَطْنُ شَرُّ وَعَاءٍ صِفْرًا وَشَرُّ وَعَاءٍ مَلَانٍ
يَعْنِي إِنْ أَخْلَيْتَهُ جُعْتَ وَإِنْ مَلَأْتَهُ آذَاكَ

「腹は空でも最も悪い器であり、一杯のときも最も悪い器である」

つまり、空にするならば飢え、一杯にすると害になる。

ذَكَرَنِي فُوكِ حِمَارِي أَهْلِي

「あなたの口が私の家の2頭のロバを思い出させた」

أَصْلُهُ أَنَّ رَجُلًا خَرَجَ يَطْلُبُ حِمَارَيْنِ

その元は次の通りである。ある男が迷子になった

ضَلًّا لَهُ فَرَأَى أَمْرًا مُنْتَقِبَةً فَأَعْجَبَتْهُ حَتَّى

2頭のロバを探しに出かけた。そこでベールをつけた女を見て

نَسِيَ الْحِمَارَيْنِ

彼女が気に入り、ロバのことを忘れてしまった。

فَلَمْ يَزَلْ يَطْلُبُ إِلَيْهَا حَتَّى سَفَرَتْ لَهُ

彼は彼女に言い寄り続け、ついに彼女は彼のためにベールを取った。

فَإِذَا هِيَ فَوْهَاءُ

ところが、なんと彼女は大口であった。

فَحِينَ رَأَى أَسْنَانَهَا ذَكَرَ الْحِمَارَيْنِ فَقَالَ

彼は彼女の歯を見たとき、2頭のロバを思い出し、言った。

ذَكَرَنِي فُوكِ حِمَارِي أَهْلِي وَأَنْشَأَ يَقُولُ

あなたの口が私の家の2頭のロバを思い出させた。そして詩を詠んだ。

لَيْتَ النَّقَابَ عَلَى النِّسَاءِ مُحَرَّمٌ

ベールが女に禁じられればよいのに

كَيْلَا تَغُرَّ قَبِيحَةَ أَنْسَانَا

醜いものが人をあざむかないように

أَعْجَزُ عَنِ الشَّيْءِ مِنَ الثَّغْلَبِ عَنِ الْعُنُقُودِ

「キツネがブドウの房に対して無力である以上に、そのものに対して無力だ」その元については、アラブ人は以下のように主張している。キツネがブドウの

فَإِنَّ أَصْلَ ذَلِكَ أَنَّ الْعَرَبَ تَزْعُمُ أَنَّ

房を見てそれを欲しがったが、手に入らず、言った。

الثَّغْلَبَ نَظَرَ إِلَى الْعُنُقُودِ فَرَامَهُ فَلَمْ يَنْلَهُ

これは酸っぱい。

فَقَالَ هَذَا حَامِضٌ

وَحَكَى الشَّاعِرُ ذَلِكَ فَقَالَ

詩人がこのことを詠んでいる。

أَيُّهَا الْعَائِبُ سَلِمَى أَنْتَ عِنْدِي كَتُّعَالَهُ

サルマー(女性の名)を非難する人よ/あなたは私が思うにキツネさんのようだ

رَامَ عُنُقُودًا فَلَمَّا أَبْصَرَ الْعُنُقُودَ طَالَهُ

ブドウの房を欲しがった/房を見たとき、高すぎた

قَالَ هَذَا حَامِضٌ لَمَّا رَأَى أَنَّ لَا يَنْالَهُ

そして言った、これは酸っぱいと/手に入らないと見たときに

أَعْمَرُ مِنْ ضَبٍّ

「トカゲよりも長寿だ」

حَكَى الزِّيَادِيُّ عَنِ الْأَصْمَعِيِّ أَنَّهُ قَالَ

ズィヤーディーがアスマイ一の語ったことを伝えた。

يَبْلُغُ الْحِجْلُ مِائَةَ سَنَةٍ ثُمَّ تَسْقُطُ سِنُّهُ

トカゲの子は100才に達し、それから歯が落ちる。

فَحِينَئِذٍ يُسَمَّى ضَبًّا وَأَنْشَدَ لِرُؤْيَةِ

そのときになって一人前のトカゲと呼ばれる。そしてルウバの詩を引用した。

فَقُلْتُ لَوْ عُمِّرْتُ سِنَّ الْحِجْلِ

私は言った たとえあなたがトカゲの年齢まで長寿を与えられたとしても

أَوْ عُمَرَ نُوحٍ زَمَنَ الْفِطْحِ

あるいは混沌の時代のノアの寿命までも

وَالصَّخْرُ مُبْتَلٌ كَطِينِ الْوَحْلِ

—その時代にはまだ岩が泥土のように濡れていた—

صِرْتُ رَهِينَ هَرَمٍ أَوْ قَتْلٍ

あなたは老齡と死の抵当になっているだろう

ذَهَبَ أَمْسٍ بِمَا فِيهِ

「昨日は昨日あったものと共に去った」(昨日のことは済んだことだ)

أَوَّلُ مَنْ قَالَ ذَلِكَ ضَمُّضَمُ بْنُ عَمْرٍو

それを最初に言った人はダムダム・ブン・アムル・

الْيَرْبُوعِيُّ وَكَانَ هَوَىٰ أَمْرًا فَطَلَبَهَا

ヤルブーイーで、彼はある女性を愛しており、あらゆる

بِكُلِّ حِيلَةٍ فَأَبَتْ عَلَيْهِ

る手段で彼女を求めたが、彼女は彼を拒んだ。

وَقَدْ كَانَ غُرُّ بْنُ ثَعْلَبَةَ بْنِ يَرْبُوعٍ يَخْتَلِفُ

グッル・ブン・サアラバ・ブン・ヤルブーウが彼女の

إِلَيْهَا فَاتَّبَعَ ضَمُّضَمٌ أَثْرَهُمَا وَقَدْ اجْتَمَعَا

もとにひんぱんに出入りしていた。ダムダムが2人の

فِي مَكَانٍ وَاحِدٍ

後をつけると、2人はある場所で一緒になっていた。

فَصَارَ فِي خَمْرِ إِلَى جَانِبَيْهِمَا يَرَاهُمَا وَلَا
يَرِيَانِهِ فَقَالَ غُرٌّ

彼は、自分からは2人が見えるが、2人からは自分が見えないところに、

こっそり行った。グウルが(詩を詠んで)言った。

قَدِيمًا تُؤَاتِينِي وَتَأْبَى بِنَفْسِهَا

以前から彼女は私に同意してくれ、

عَلَى الْمَرْءِ جَوَابِ التَّوْفَةِ ضَمُضِمِ

あの男、沙漠の放浪者ダムダムを拒否した

فَشَدَّ عَلَيْهِ ضَمُضِمٌ فَقَتَلَهُ وَقَالَ

するとダムダムは彼に襲いかかり、殺した。そして(詩を詠んで)言った。

سَتَعْلَمُ أَنِّي لَسْتُ أَمِنَ مُبْغَضًا

思い知らせてやろう 私が嫌われ者になったら決して安全でないことを

وَأَنَّكَ عَنْهَا إِنْ نَأَيْتُ بِمَعْزِلِ

もし私が遠ざかるなら、お前も彼女から隔てられることを

فَقِيلَ لَهُ لِمَ قَتَلْتَ ابْنَ عَمِّكَ

誰かが彼に言った。あなたはなぜ従兄弟を殺したのか。

قَالَ ذَهَبَ أَمْسٍ بِمَا فِيهِ

彼は言った。昨日のことは済んだことだ。

فَذَهَبَ قَوْلُهُ مَثَلًا

そして彼の言葉がことわざになった。

5. アシュアブより欲ばりだ

أَطْمَعُ مِنْ أَشْعَبِ

「アシュアブより欲ばりだ」

هُوَ رَجُلٌ مِنْ أَهْلِ الْمَدِينَةِ يُقَالُ لَهُ

彼はメディナの人であり、欲ばりのアシュアブと

أَشْعَبُ الطَّمَّاعُ وَهُوَ أَشْعَبُ بْنُ جُبَيْرٍ

مَوْلَى عَبْدِ اللَّهِ بْنِ الزُّبَيْرِ وَكُنْيَتُهُ أَبُو

الْعَلَاءِ

سَأَلَ أَبُو السَّمْرَاءِ أَبَا عُبَيْدَةَ عَنْ طَمَعِهِ

فَقَالَ اجْتَمَعَ عَلَيْهِ يَوْمًا غِلْمَانٌ 1 مِنْ

غِلْمَانَ الْمَدِينَةِ يُعَابِثُونَهُ

وَكَانَ مَزَاحًا ظَرِيفًا مُغْنِيًا فَأَذَاهُ الْغِلْمَةُ 1

فَقَالَ لَهُمْ إِنَّ فِي دَارِ بَنِي فَلَانٍ عُرْسًا

فَأَنْطَلِقُوا إِلَيَّ ثُمَّ فَهُوَ أَنْفَعُ لَكُمْ

فَأَنْطَلِقُوا وَتَرَكَوهُ فَلَمَّا مَضَوْا قَالَ لَعَلَّ

الَّذِي قُلْتُ مِنْ ذَلِكَ حَقٌّ

فَمَضَى فِي أَثَرِهِمْ نَحْوَ الْمَوْضِعِ فَلَمْ يَجِدْ

شَيْئًا وَظَفَرَ بِهِ الْغِلْمَانُ هُنَاكَ فَأَذَوْهُ

وَقَالَ أَشْعَبُ وَهَبَ لِي غُلَامٌ فَجِئْتُ إِلَى

言われている。本名はアシュアブ・ブン・ジュバイルであり、アブドゥッラー・ブン・

ズバイルの解放奴隷で、クンヤ(「~の父」という

呼び名)はアブ・ル・アラールである。

彼の貪欲さについてアブ・ツ・サムラーがアブー・ウバイダに尋ねた。

彼は言った。ある日彼のところにメディナの若者たち

の何人かが集まって、彼をからかった。

彼は冗談を言う人であり、とんちがあり、歌い手でもあった。数人の若者が彼を痛めつけた。彼は彼らに言った。誰その家で婚礼がある、

そこへ行け、そのほうがお前たちに有益だ。

彼らは立ち去って彼を放っていった。彼らが行ってしまうと、彼は言った。

ことによると、私が言ったことは本当かもしれない。

彼はその場所のほうへ彼らの後を追って行ったが、

何もなかった。若者たちはそこで彼を捕まえ、痛めつけた。.....

またアシュアブは次のように言った。私は召使の少年をもらった。

أُمِّي بِحِمَارٍ مَوْقُورٍ ۚ مِنْ كُلِّ شَيْءٍ

私はあらゆるものを積んだ
ロバとその少年を連れて

وَالْغُلَامِ

母のところに来た。

فَقَالَتْ أُمِّي مَا هَذَا الْغُلَامُ فَأَشْفَقْتُ عَلَيْهَا

母は言った。この少年は
何？ 私は少年をもらった
と言って

مِنْ أَنْ أَقُولَ وَهَبَ لِي فَتَمُوتَ فَرِحًا

彼女が喜びのあまり死ん
ではいけないと気を使っ
た。

فَقُلْتُ وَهَبَ لِي غَيْرُ فَقَالَتْ وَمَا غَيْرُ

私は言った。もらったん
だ、غ G。彼女は言った。で
غ Gとは何？

قُلْتُ لَامٌ قَالَتْ وَمَا لَامٌ

私は言った。ل L。彼女は
言った。でل Lとは何？

قُلْتُ أَلِفٌ قَالَتْ وَمَا أَلِفٌ

私は言った。ا A。彼女は
言った。でا Aとは何？

قُلْتُ مِيمٌ قَالَتْ وَمَا مِيمٌ

私は言った。م M 彼女は言
った。でم Mとは何？

قُلْتُ وَهَبَ لِي غُلَامٌ فَغَضِبِي عَلَيْهَا فَرِحًا

私は言った。غلام GLĀM
(少年)をもらった。すると彼
女は喜びのあまり気絶した
もし私が文字を切らずに言
ったら、彼女は死んでいた
だろう。

وَلَوْ لَمْ أَقْطَعِ الْحُرُوفَ لَمَاتَتْ

サーリム・ブン・アブドゥッラ
ーが彼に言った。あなたの

وَقَالَ لَهُ سَالِمُ بْنُ عَبْدِ اللَّهِ مَا بَلَغَ مِنْ

欲ばりの極致は何です
か。彼は言った。私は葬列

طَمَعِكَ قَالَ مَا نَظَرْتُ قَطُّ إِلَى اثْنَيْنِ

で2人の人がささやき合っ
ているのを見ると、必ず、
死んだ人が

فِي جِنَازَةٍ يَتَسَارَّانِ إِلَّا قَدَّرْتُ أَنْ أَلْمَيْتَ

私に財産のいくらかを遺言
してくれたのだと想像し、

قَدْ أَوْصَى لِي مِنْ مَالِهِ بِشَيْءٍ

وَمَا أُدْخِلَ أَحَدٌ يَدَهُ إِلَى كُمِّهِ إِلَّا أَظْنَهُ

誰かが袖に手を入れると、必ず、私に何かをくれるのだと

يُعْطِينِي شَيْئًا

思ってしまうのです。

1 共に¹ **غلام**の複数形だが、**غلمان**は大複数(10以上)、**غلمة**は小複数(3~10)に用いられるとされる。

2 「荷を積む」の意味で使うのはふつう4形の**أَوْقَرَ**であるが、ここでは1形(受動分詞)でその意味に使われている。

☆アシュアブの他の話 (العقد الفريد ² **الفريد** ابن عبد ربه) 『無比の首飾り』から)

سَاوَمَ أَشْعَبُ رَجُلًا بِقَوْسٍ

アシュアブがある男と弓の値段をかけあつた。

فَقَالَ لَهُ أَقَلُّ تَمَنِيهَا دِينَارٌ

男は彼に言った。ぎりぎりの値段は1ディーナールだ。

قَالَ أَشْعَبُ وَاللَّهِ لَوْ أَنَّكَ إِذَا رَمَيْتَ بِهَا

アシュアブは言った。神かけて、もしあなたがその弓

طَائِرًا فِي جَوِّ السَّمَاءِ فَوَقَعَ مَشْوِيًّا بَيْنَ

で天空の鳥を射て、それが2切れのパンの間に

رَغِيفَيْنِ مَا أَشْتَرَيْتُهَا مِنْكَ بِدِينَارٍ أَبَدًا

焼き肉になって落ちてきたとしても、私は1ディーナールでは決して買わない。

6. さまざまなことわざ3

أَجْبِنُ مِنْ هَجْرَسٍ

「猿よりも臆病だ」

زَعَمَ مُحَمَّدُ بْنُ حَبِيبٍ أَنَّهُ التَّغْلَبُ

ムハンマド・ブン・ハビーブは主張している。هجرسは「キツネ」の意味であると。

قَالَ يُقَالُ إِنَّهُ وَلَدُ الثَّغْلَبِ

彼はまた言っている。それは「キツネのこども」だとも言われている。

قَالَ وَيُرَادُ بِهِ هَهُنَا الْقُرْدُ وَذَلِكَ أَنَّهُ لَا يَنَامُ

彼はまた言っている。ここでは「猿」の意味で、

إِلَّا وَفِي يَدِهِ حَجْرٌ مَخَافَةَ الذِّئْبِ أَنْ
يَأْكُلَهُ

それは、猿は狼に食べられるのを怖れて、石を手に持たなければ

眠らないからである。

قَالَ وَتَحَدَّثَ رَجُلٌ مِنْ أَهْلِ مَكَّةَ أَنَّهُ إِذَا

彼は言う。メッカのある人が語った。夜になると、猿達が

كَانَ اللَّيْلُ رَأَيْتَ الْقُرُودَ تَجْتَمِعُ فِي

一つの場所に集まるのを見るだろう、

مَوْضِعٍ وَاحِدٍ ثُمَّ تَبِيْتُ مُسْتَطِيلَةً الْوَاحِدُ

そして彼らは縦に並んで、つまり、1匹が他の1匹の

مِنْهَا فِي أَثَرِ الْأَخْرِ وَفِي يَدِ كُلِّ وَاحِدٍ

後になるようにして各々が手に石を持って夜を過ごす、

حَجْرٌ لَيْلًا يَنَامُ فَيَأْكُلُهُ الذِّئْبُ

眠って狼に食べられないように。

فَإِنْ نَامَ وَاحِدٌ سَقَطَ مِنْ يَدِهِ الْحَجْرُ

もし1匹が眠ったら、手から石が落ち、

فَفَزَعَتْ كُلُّهَا فَيَتَحَوَّلُ الْأَخْرُ فَيَصِيرُ

みんなびっくりして目が覚め、そこで別のものが代わって

قُدَّامَهَا فَيَكُونُ ذَلِكَ دَأْبَهَا طُولَ اللَّيْلِ

先頭になる。それが夜じゅうの彼らの習慣である。

فَتُصْبِحُ مِنَ الْمَوْضِعِ الَّذِي بَاتَتْ فِيهِ

朝になると夜を過ごした場所から数マイル離れた

عَلَى أَمْيَالٍ جُبْنَا مِنْهَا وَخَوْرًا فِي طِبَاعِهَا

場所へ行く。臆病と性質の弱さのためである。

الظَّبَاءَ عَلَى الْبَقْرِ

يُضْرَبُ عِنْدَ انْقِطَاعِ مَا بَيْنَ الرَّجُلَيْنِ

مِنَ الْقَرَابَةِ وَالصَّدَاقَةِ

وَكَانَ الرَّجُلُ فِي الْجَاهِلِيَّةِ إِذَا قَالَ

لِامْرَأَتِهِ الظَّبَّاءَ عَلَى الْبَقْرِ بَانَتْ مِنْهُ

وَكَانَ عِنْدَهُمْ طَلَاقًا

وَنُصِبَ الظَّبَّاءُ عَلَى مَعْنَى اخْتَرْتُ أَوْ

اخْتَارُ الظَّبَّاءَ عَلَى الْبَقْرِ وَالْبَقْرُ كِنَايَةٌ

عَنِ النِّسَاءِ

「牛よりもカモシカを」

2人の中の親族関係や友人関係が断たれるときに

用いられる。

イスラーム以前、男性が女性(妻)に「牛よりもカモシカを」

と言うと、彼女は彼から離れ、彼らにおいては

離婚となった。

ظباء(カモシカ)が対格になるのは、「私は牛よりカモシカを選んだ、

あるいは、選ぶ」の意味になっているからで、

牛は女性を暗示する言葉である。

أَظْلَمُ مِنْ ذَنْبِ

أَمَّا مَا جَاءَ فِي أَشْعَارِهِمْ فَحَكَى ابْنُ

الْأَعْرَابِيِّ أَنَّ أَعْرَابِيًّا رَوَى بِالْبَادِيَةِ ذَنْبًا

فَلَمَّا شَبَّ أَفْتَرَسَ سَخْلَةً لَهُ فَقَالَ الْأَعْرَابِيُّ

「狼よりも横暴だ」

彼らの詩に出てくるものについてはイブン・アウラービーが語るところによると、次の通りである。あるベドウィンが沙漠で狼を育てた。

狼が成長すると彼の雌小羊を食い殺した。それでベドウィンは詩を詠んだ。

فَرَسْتَ شُوَيْهَتِي وَفَجَعْتَ طِفْلًا¹

お前は私の小羊を殺し、子供達と女達を悲しませた

وَنَسَوْنَا وَأَنْتَ لَهُمْ رَيْبُ

お前は彼らの養子であるのに

نَشَأْتَ مَعَ السَّخَالِ وَأَنْتَ طِفْلٌ²

お前は小さい間は小羊達と共に育った

فَمَا أَدْرَاكَ أَنَّ أَبَاكَ ذَيْبٌ²

お前の父が狼だと何がお前に知らせたのか

إِذَا كَانَ الطَّبَّاعُ طِبَّاعَ سُوءٍ

もし元々の根性が悪いのなら

فَلَيْسَ بِمُصْلِحٍ طَبَّاعًا أَدِيبُ

教師は性質を直すことができない

فَقَالَ آخِرُ

また別の者がこう詠んでいる。

وَأَنْتَ كَجَرِّوِ الذُّبِّ لَيْسَ بِأَلْفِ

あなたは狼の子のようだ人になれることがない

أَبَى الذُّبِّ إِلَّا أَنْ يَخُونَ وَيَظْلِمَا

狼はどうしても裏切ったり無法を行ったりするものだ

1 ここでは集合名詞として使われている。

2 本来は ذئبٌ だが、脚韻を踏ませるため。

أَحْمَقُ مِنْ رَيْعَةِ الْبُكَاءِ

「泣き虫のラビーアより愚かだ」

هُوَ رَيْعَةُ بِنِ عَامِرِ بْنِ صَعْصَعَةَ

彼はラビーア・ブン・アーミル・ブン・サアサアである。

وَمِنْ حُمْقِهِ أَنَّ أُمَّهُ كَانَتْ تَزَوَّجَتْ رَجُلًا
 مِنْ بَعْدِ أَبِيهِ فَدَخَلَ يَوْمًا عَلَيْهَا الْخِبَاءَ
 وَهُوَ رَجُلٌ قَدْ أَلْتَحَى فَرَأَى أُمَّهُ تَحْتَ
 زَوْجِهَا يُبَاضِعُهَا فَتَوَهَّمَنَّ أَنَّهُ يُرِيدُ قَتْلَهَا
 فَرَفَعَ صَوْتَهُ بِالْبُكَاءِ وَهَتَكَ عَنْهُمَا الْخِبَاءَ
 وَقَالَ وَآمَاءَ فَلَحِقَهُ أَهْلُ الْحَيِّ وَقَالُوا
 مَا وَرَاءَكَ

قَالَ دَخَلْتُ الْخِبَاءَ فَصَادَفْتُ فَلَانًا عَلَى
 بَطْنِ أُمِّي يُرِيدُ قَتْلَهَا
 فَقَالُوا أَهْوَنُ مَقْتُولٍ أُمَّ تَحْتَ زَوْجِ
 فَذَهَبَتْ مَثَلًا وَسُمِّيَ رِبِيعَةَ الْبُكَاءِ
 فَضُرِبَ بِحُمْقِهِ الْمَثَلُ

彼の愚かさについては次のような話がある。父の死後、彼の母親はある男と結婚していた。ある日、彼が彼女のところを訪れテントに入った。彼は

もうひげの生えた大人であった。が、母親が夫の下に

なって一緒に寝ているのを見て、その男が母を殺そうとしていると思い込んだ。

それで泣き声を上げて、2人のいるテントを裂いて

言った。ああ、お母さん。そこで部落の人々が彼を

取り抑えて、言った。どうしたのか。

彼は言った。私がテントに入ると、誰それがお母さん

の腹の上で、彼女を殺そうとしていた。

彼らは言った。夫の下にいる母親はいとも簡単に殺されるものだ¹。

そしてことわざになり、彼は泣き虫のラビーアと呼ばれ、

彼の愚かさはことわざとして用いられた。

¹ 軽々しく「殺された」と言われるの意。

كُنْ حُلْمًا كُنْهُ

يُضْرَبُ لِلْهَائِلِ مِنَ الْخَبْرِ أَى لِيَكُنْ حُلْمًا
مِنَ الْأَحْلَامِ وَلَا يَتَحَقَّقُ
وَأَصْلُهُ أَنَّ رَجُلًا أَهْوَى بِرُمْحِهِ حَتَّى
جَعَلَهُ بَيْنَ عَيْنَيْ أَمْرَأَةٍ وَهِيَ نَائِمَةٌ
فَأَسْتَيْقَظَتْ فَلَمَّا رَأَتْهُ فَرَعَتْ ثُمَّ غَمَضَتْ
عَيْنَيْهَا وَقَالَتْ كُنْ حُلْمًا كُنْهُ

「夢であれ、夢であれ」

恐ろしい知らせに用いられる。すなわち、一つの夢で

あれ、現実であってはならぬ。

その元はこうである。ある男が槍を落とし、それが

眠っている女の両目の間に落ちた。

彼女は目を覚まし、それを見て驚いた。それから両目を

つぶって言った。夢であれ、夢であれ。

أَحْمَقُ مِنْ جُحَا

.....وَمِنْ حُمْقِهِ أَيْضًا
أَنَّهُ خَرَجَ مِنْ مَنْزِلِهِ يَوْمًا بَغْلَسٍ فَعَثَرَ
فِي دِهْلِيزِ مَنْزِلِهِ بِقَتِيلٍ فَضَجَرَ بِهِ
وَجَرَّهُ إِلَى بئرِ مَنْزِلِهِ فَأَلْقَاهُ فِيهَا
فَنَذَرَ بِهِ أَبُوهُ فَأَخْرَجَهُ وَغَيَّبَهُ وَخَنَقَ كَبْشًا

「ジュハーより愚かだ」

.....また彼の愚かさには次の話がある。

彼がある日、明け方の暗闇に家から出て、家の路地で

殺された人に突き当たった。彼は不安にかられた。

彼はその人を家の井戸まで引きずって行き、中に投げ込んだ。

彼の父親がその危険に気がつき、取り出して隠した。そして雄羊を絞めて

حَتَّى قَتَلَهُ وَأَلْقَاهُ فِي الْبِئْرِ

殺し、それを井戸に投げ込んだ。

ثُمَّ إِنَّ أَهْلَ الْقَتِيلِ طَافُوا فِي سِكَكِ

その後、殺された人の家族がクーファの町の道々を

الْكُوفَةِ يَبْحَثُونَ عَنْهُ فَتَلَقَّاهُمْ جُحَا فَقَالَ

回って、その人を探し、ジユハーと出会った。彼は言った。

فِي دَارِنَا رَجُلٌ مَقْتُولٌ فَأَنْظَرُوا أَهْو

私の家に殺された男がいる、彼があなたがたの仲間

صَاحِبِكُمْ

かどうか、見てごらんさない。

فَعَدَلُوا إِلَى مَنْزِلِهِ وَأَنْزَلُوهُ فِي الْبِئْرِ

そして彼らは彼の家のほうへ道をそれて行った。彼らは彼を井戸に下ろした。

فَلَمَّا رَأَى الْكَبِشَ نَادَاهُمْ وَقَالَ يَا هَؤُلَاءِ

彼は雄羊を見ると、彼らに叫んだ。みなさん、

هَلْ كَانَ لِصَاحِبِكُمْ قَرْنٌ فَضَحِكُوا وَمَرُّوا

あなたがたのお仲間には角がありましたか。彼らは笑って行き過ぎた。

كَادَ الْعَرُوسُ يَكُونُ مَلِكًا

「花婿はほとんど王である」

الْعَرَبُ تَقُولُ لِلرَّجُلِ عَرُوسٌ وَلِلْمَرْأَةِ أَيْضًا

アラブ人は男に対しても女に対してもエروس(花嫁、花

وَيُرَادُ هَهُنَا الرَّجُلُ

婿)と言う。ここでは男性が意味されている。

أَيُّ كَادَ يَكُونُ مَلِكًا لِعِزَّتِهِ فِي نَفْسِهِ وَأَهْلِهِ

すなわち、彼は自分の力のゆえに、自分や家族に対し、ほとんど王である。

صُغْرَاهُنَّ شُرَاهُنَّ

「一番年下が一番悪い」

صغراها شرها の形でも、伝えられ、また「一番苦い」とも伝えられている。

وَيُرَوَّى صُغْرَاهَا شُرَاهَا وَيُرَوَّى مُرَّاهَا
أَوَّلُ مَنْ قَالَ ذَلِكَ أَمْرَأَةٌ كَانَتْ فِي زَمَنِ

最初にそれを言ったのは、ルクマーン・ブン・アードの

時代の、ある女性であった。彼女にはシャジーと

لُقْمَانَ بْنِ عَادٍ وَكَانَ لَهَا زَوْجٌ يُقَالُ لَهُ
الشَّجِيُّ وَخَلِيلٌ يُقَالُ لَهُ الْخَلِيُّ

いう夫がいて、ハリーという男友達がいた。

ルクマーンは彼らのところに滞在していたが、この女性が

فَنَزَلَ لُقْمَانُ بِهِمْ فَرَأَى هَذِهِ الْمَرْأَةَ ذَاتَ
يَوْمٍ أَنْتَبَذَتْ مِنْ بُيُوتِ الْحَيِّ فَأَرْتَابَ

ある日、部落の家々からそっと出て行くのを見た。

ルクマーンは彼女のことを不審に思い、後をつけた。

لُقْمَانُ بِأَمْرِهَا فَتَبِعَهَا

そして彼は男が彼女の前に現れたのを見た。2人は

فَرَأَى رَجُلًا عَرَضَ لَهَا وَمَضِيََا جَمِيعًا
وَقَضِيَا حَاجَتَهُمَا

一緒に行き、用事を済ませた。

それから女は男に言った。私は死んだふりをするから

ثُمَّ إِنَّ الْمَرْأَةَ قَالَتْ لِلرَّجُلِ إِنِّي أَتَمَّوْتُ
فَإِذَا أَسْنَدُونِي فِي رَجْمِي فَأَتِي لَيْلًا

彼らが私を墓に安置したら、夜に私のところに来て

私を出してください、そして人々が私達のことを

فَأَخْرِجْنِي ثُمَّ أَذْهَبْ إِلَى مَكَانٍ لَا يَعْرِفُنَا

أَهْلُهُ

知らない場所に連れて行ってください。

فَلَمَّا سَمِعَ لُقْمَانَ ذَلِكَ قَالَ وَيْلٌ لِلشَّجِيِّ

ルクマーンはそれを聞いたとき言った。ハリーの

مِنَ الْخَلِيِّ فَأَرْسَلَهَا مَثَلًا

ためにシャジーは災いなるかな。それはことわざになった。

ثُمَّ رَجَعَتِ الْمَرْأَةُ إِلَى مَكَانِهَا وَفَعَلَتْ مَا

それから女は自分の場所に戻り、自分が言った通りに

قَالَتْ فَأَخْرَجَهَا الرَّجُلُ وَأَنْطَلَقَ بِهَا أَيَّامًا

した。そしてその男が彼女を連れ出し、何日か他の

إِلَى مَكَانٍ آخَرَ

場所へ行った。

ثُمَّ تَحَوَّلَتْ إِلَى الْحَيِّ بَعْدَ بُرْهَةٍ

そして、しばらくして彼女は(元の)部族に移ってきた。

فَبَيْنَا هِيَ ذَاتَ يَوْمٍ قَاعِدَةٌ مَرَّتْ بِهَا بَنَاتُهَا

ある日彼女が座っていると、彼女の娘達が通りかかった。

فَنظَرَتْ إِلَيْهَا الْكُبْرَى فَقَالَتْ أُمِّي وَاللَّهِ

一番上の娘が彼女を見て言った。神かけてお母さんだ。

قَالَتْ الْوُسْطَى صَدَقْتَ وَاللَّهِ

真ん中の娘が言った。神かけて、本当だ。

قَالَتِ الْمَرْأَةُ كَذَبْتُمَا مَا أَنَا لَكُمَا بِأُمَّ وَلَا

女は言った。あなたがた2人は嘘を言った、私はあなたがたの母ではなく、

أَبِيكُمَا بِأُمْرَةٍ

あなたがたの父の妻でもない。(それで上の2人の娘はその言葉を信じた)

فَقَالَتْ لَهُمَا الصُّغْرَى أَمَا تَعْرِفَانِ مُحْيَاَهَا

一番下の娘が2人に言った。あなたがた2人はお母さんの顔を知らないの？

وَتَعَلَّقَتْ بِهَا وَصَرَخَتْ

そして彼女にすがりついて泣き叫んだ。

فَقَالَتْ أُمُّ حَيْنَ رَأَتْ ذَلِكَ صُغْرَاهُنَّ

それを見た母親は言った。
一番年下が一番悪い。

شُرَاهُنَّ فَذَهَبَتْ مَثَلًا

そしてそれがことわざにな
った。

ثُمَّ إِنَّ النَّاسَ اجْتَمَعُوا فَعَرَفُوهَا فَرَفَعُوا

それから人々が集まってき
て彼女であると認めた。

الْقِصَّةَ إِلَى لُقْمَانَ بْنِ عَادٍ وَقَالُوا لَهُ

彼らはその話をルクマー
ン・ブン・アードに伝え、彼
に言った。

أَقْضِ بَيْنَنَا فَلَمَّا نَظَرَ لُقْمَانُ إِلَى الْمَرْأَةِ

私達の間を裁いてくださ
い。ルクマーンが女を見た
とき彼女だと知り、

عَرَفَهَا فَقَالَ عِنْدَ جُهَيْنَةَ الْخَبْرُ الْيَقِينُ

(ことわざを引用して)言っ
た。「ジュハイナだけが真
相を知っている」

يَعْنِي نَفْسَهُ وَمَا عَايَنَ مِنْهَا

すなわち、彼自身だけが、
彼女について目撃したこと
を知っているという意味。

فَأَخْبَرَ لُقْمَانُ الزَّوْجَ بِمَا عَرَفَ وَأَقْبَلَ عَلَى

ルクマーンは彼が知ってい
ることを夫に告げ、女の

الْمَرْأَةِ فَقَصَّ عَلَيْهَا قِصَّتَهَا كَيْفَ صَنَعَتْ

もとに来て、彼女に、彼女
がどのようにしたか、

وَكَيْفَ قَالَتْ لِصَدِيقِهَا

男友達にどのように言った
かを話した。

فَلَمَّا أَتَاهَا بِمَا لَا تُتَكْرَرُ قَالَتْ مَا كَانَ هَذَا

否定できないことを彼がも
ちだしたので彼女は言っ
た。

فِي حِسَابِي فَأَرْسَلْتُهَا مَثَلًا

これは私の計算にはなか
った。これもことわざになっ
た。

أَوْفَى مِنَ السَّمْوَعَلِ

هُوَ السَّمْوَعَلُ بْنُ حَيَّانَ بْنِ عَادِيَاءَ

الْيَهُودِيُّ

وَكَانَ مِنْ وَفَائِهِ أَنَّ أَمْرًا الْقَيْسِ لَمَّا أَرَادَ

الْخُرُوجَ إِلَى قَيْصَرَ اسْتَوْدَعَ السَّمْوَعَلَ

دُرُوعًا وَأُحْيَحَةَ بْنَ الْجَلَّاحِ أَيْضًا دُرُوعًا

فَلَمَّا مَاتَ أَمْرُ الْقَيْسِ غَزَاهُ مَلِكٌ مِنْ

مُلُوكِ الشَّامِ فَتَحَرَّرَ مِنْهُ السَّمْوَعَلُ

فَأَخَذَ الْمَلِكُ ابْنًا لَهُ وَكَانَ خَارِجًا مِنْ

الْحِصْنِ

فَصَاحَ الْمَلِكُ بِالسَّمْوَعَلَ فَأَشْرَفَ عَلَيْهِ

فَقَالَ هَذَا ابْنُكَ فِي يَدَيَّ وَقَدْ عَلِمْتَ

أَنَّ أَمْرًا الْقَيْسِ ابْنُ عَمِّي وَمِنْ عَشِيرَتِي

「サマウアルより信義を守る」

彼はユダヤ人、サマウアル・ブン・ハイヤーン・ブン・

アーディヤーである

彼の信義については次のような話がある、イムルウ・ル・カイスがビザンツ皇帝のところへ出かけようとしたとき、サマウアルに(家宝の)鎧を預けた。

ウハイハ・ブン・ジュラーフも彼に鎧を預けた。

イムルウ・ル・カイスが死んだとき、シャーム(シリア)

のある王が彼を攻めたが、サマウアルは防いだ。

その王は彼の息子を捕えた。その息子は城から

出ていたのだった。

王がサマウアルに向かって叫んだので、彼は王を見下ろした。

王は言った。これはあなたの息子だ、私の手中にある。

あなたはイムルウ・ル・カイスが私の従兄弟、私の一族であり、

وَأَنَا أَحَقُّ بِمِيرَاتِهِ

私が彼の遺産を受け継ぐに最もふさわしいことを知っているだろう(実は嘘)

فَإِنْ دَفَعْتَ إِلَيَّ الدَّرُوعَ ۖ وَالْأُذُنَ ذَبَحْتُ أَبْنَكَ

もし私に鎧を渡せばよし、さもなければ息子を殺す。

فَقَالَ أَجَلْنِي فَأَجَلَهُ فَجَمَعَ أَهْلَ بَيْتِهِ

サマウアルは言った。猶予を与えよ。王は猶予を与えた。

وَنِسَاءَهُ فَشَاوَرَهُمْ

サマウアルは身内の者や女達を集め、彼らに相談した。

فَكُلُّهُ أَشَارَ عَلَيْهِ أَنْ يَدْفَعَ الدَّرُوعَ وَيَسْتَنْقِذَ

皆が、鎧を渡して息子の命乞いをするようにと彼に

أَبْنَهُ

進言した。

فَلَمَّا أَصْبَحَ أَشْرَفَ عَلَيْهِ وَقَالَ لَيْسَ إِلَيَّ

朝になると彼は王を見下ろして言った。

دَفْعَ الدَّرُوعِ سَبِيلٌ فَأَصْنَعُ مَا أَنْتَ صَانِعٌ

鎧を渡すことはできない、お前がするようにせよ。

فَذَبَحَ الْمَلِكُ أَبْنَهُ وَهُوَ مُشْرِفٌ يَنْظُرُ إِلَيْهِ

彼が見下ろして見ているまま、王は彼の息子を殺した。

ثُمَّ أَنْصَرَفَ الْمَلِكُ بِالْخَيْبَةِ

そして王は失望して立ち去った。

فَوَافَى السَّمَوَاتِ بِالدَّرُوعِ الْمَوْسِمَ فَدَفَعَهَا

サマウアルは祭りの日に鎧を運んできて、イムルウ・ル・カイスの

إِلَى وَرَثَةِ أَمْرِئِ الْقَيْسِ وَقَالَ فِي ذَلِكَ

後継者達に渡し、そのことについて詩を詠んだ。

وَفَيْتُ بِأَدْرُعِ الْكِنْدِيِّ إِنِّي

私はキンダ部族の鎧を守った

إِذَا مَا خَانَ أَقْوَامٌ وَفَيْتُ

諸人が裏切っても私は守る

وَقَالُوا إِنَّهُ كَنْزٌ رَغِيبٌ

彼らは言った。それは誰もが
が欲しがる宝だと

فَلَا وَاللَّهِ أَغْدِرُ مَا مَشَيْتُ

神かけて、私は足が動く
(生きてい)限り、裏切ら
ない

بَنَى لِي عَادِيًا حِصْنًا حَصِينًا

(祖父の)アーディヤーは私
に堅固な城を建てた

وَبِئْرًا كُلَّمَا شَبْتُ أُسْتَقِيْتُ

望めばいつでも汲める井
戸も

طِمْرًا تَزْلِقُ الْعُقْبَانُ عَنْهُ

(その城は)驚でさえ足を
すべらせるほど背の高い
名馬

إِذَا مَا نَابَنِي ظَلُمٌ أَبِيْتُ

暴虐が私を襲っても撃退
できる

1 إن の条件節に対する主節(帰結節)が省略されている

9.さまざまなことわざ4

مَنْ خَشِيَ الذُّبَّ أَعَدَّ كَلْبًا

「狼を怖れる者は犬を用意
する」

مَنْ أَنْفَقَ مَالَهُ عَلَى نَفْسِهِ فَلَا يَتَحَمَّدُ بِهِ
عَلَى النَّاسِ

「財産を自分自身のため
に費やす者は、その財産
を人々に自慢してはならな
い」

مَنْ عَضَّ عَلَى شِبْدَعِهِ أَمِنَ الْأَثَامَ

「舌をかみしめる者は諸々の罪から安全である」

بَاتَ بِلَيْلَةٍ أَنْقَدَ

「ハリネズミの夜を過ごした」

يُضْرَبُ لِمَنْ سَهَرَ لَيْلَهُ أَجْمَعَ

夜通し起きていた人に用いられる。

أَبْرٌ مِنْ فَحَسٍ

「ファルハスよりも親孝行だ」

هُوَ رَجُلٌ مِنْ بَنِي شَيْبَانَ

彼はバヌー・シャイバーン部族の人である。

زَعَمُوا أَنَّهُ حَمَلَ أَبَاهُ وَكَانَ خَرِفًا كَبِيرَ

彼らが言うには、彼はもうろくした高齢の父親を

الْسِّنِّ عَلَى عَاتِقِهِ إِلَى بَيْتِ اللَّهِ الْحَرَامِ

肩にかついで聖なる神殿(カアバ)に運び、

حَتَّى أَحَجَّه

巡礼させた。

تَصْنَعُ فِي عَامَيْنِ كُرْزًا مِنْ وَبَرٍ

「2年かかって、ラクダの毛の袋を作る」

يُضْرَبُ مَثَلًا لِلْبَطِيءِ فِي أَمْرِهِ وَعَمَلِهِ

自分のことや自分の仕事に遅い者のたとえに用いられる。

ثَمْرَةُ الْجُبْنِ لَا رِيحٌ وَلَا خُسْرٌ

「臆病者の果実はもうけも損もない」

ظَلَّتْ عَلَى فِرَاشِهَا تَكْرَى

「彼女はベッドの上で眠り続けた」

يُضْرَبُ مَثَلًا لِلْخَلِيِّ الْفَارِغِ مِنَ الْأَمْرِ

することのない者のたとえに用いられる。

أَخَاكَ أَخَاكَ إِنَّ مَنْ لَا أَخَا لَهُ

「あなたの兄弟を敬え 兄弟のない者は

كَسَاعٍ إِلَى الْبَيْدَا¹ بِغَيْرِ سِلَاحٍ

武器なしで沙漠を進む者のようだ」

(وَإِنَّ أَبْنَ عَمِّ الْمَرْءِ فَأَعْلَمُ جَنَاحَهُ

(人の従兄弟というのはその人の翼であることを知れ

وَهَلْ يَنْهَضُ الْبَازِي بِغَيْرِ جَنَاحٍ)

翼なしでタカは飛び立つだろうか)

1 البيداء (沙漠)の代わりに الْهَيْجَا (戦い)となっている場合もある

(カッコ内はマイダーニーは伝えていないが、上の詩句の続きとして他の書にあるもの)

ظِلَالُ صَيْفٍ مَا لَهَا قِطَارٌ

「夏の雲は水滴を持たない」

يُضْرَبُ لِمَنْ لَهُ ثَرْوَةٌ وَلَا يُجْدَى عَلَى أَحَدٍ

富はあるが誰にも利益を与えない人のたとえに用いられる。

أَرَى خَالًا وَلَا أَرَى مَطْرًا

「私は雨雲を見るが、雨を見ない」

يُضْرَبُ لِلْكَثِيرِ الْمَالِ لَا يُصَابُ مِنْهُ خَيْرٌ

大金を持っているが、その人から善が得られないこと
のたとえに用いられる。

طَلَبَ أَمْرًا وَلَا تِ أَوَانٍ

「あることを求めたが、もはやその時ではなかった」

(関連する詩句として)

طَلَبُوا صَلْحَنَا وَلَا تِ أَوَانٍ¹

彼らは我々との和睦を求めたが、もはやその時ではなかった

فَأَجَبْنَا أَنْ لَيْسَ حِينَ بَقَاءِ

それで我々は答えた 今や生き残れるときではない

¹ لَا تِのあとに時を表す名詞の対格または属格が来て、「もはや～の時ではない」の意味になる

ex. لَا تِ حِينَ مَنَاصِ (コーラン38章3節)

كَدُودَةِ الْقَرِّ

「蚕のようだ」

أَلَمْ تَرَ أَنَّ الْمَرْءَ طُولَ حَيَاتِهِ

(関連する詩句として)
あなたは見たことがないか
人が生涯

مُعْنَى بِأَمْرِ مَا يَزَالُ يُعَالِجُهُ

携わっている仕事に苦勞しているのを

كَدُودٌ كَدُودِ الْقَرِّ يَنْسُجُ دَائِبًا¹

蚕のようにあくせくして
蚕はずっと織り

وَيَهْلِكُ غَمًّا وَسَطًا مَا هُوَ نَاسِجُهُ

自分が織っているものの
中で悲しみながら死んでいく

¹ この句は **كُدُودٌ غَدَا لِلْقَرِّ يَنْسُجُ دَائِبًا** とも伝えられている。

مَنْ طَلَبَ الْحَوَائِجَ مِنْ لَيْمٍ

卑しい人に必要なものを求める人は

كَمَنْ طَلَبَ الْعِظَامَ مِنَ الْكِلَابِ

犬に骨を求める人のようだ

マイダーニーが挙げている **أبْخَلَ مِنْ كَلْبٍ** (犬よりもけちだ) に関する詩句として他の書に引用されているもの

10.バーススより不吉だ

أَشْأَمُ مِنَ الْبَسُوسِ

「バーススより不吉だ」

هِيَ بَسُوسٌ بِنْتُ مُنْقِذِ التَّمِيمِيَّةِ خَالَةٌ

彼女はタミーム部族出身、ムンキズの娘バーススであり、ジャツサース・ブン・ムッラ・ブン・ズフル・シャイバーニーのおばである。

جَسَّاسِ بْنِ مُرَّةَ بْنِ ذُهْلِ الشَّيْبَانِيِّ قَاتِلِ

彼(ジャツサース)がクライブを殺したのである。

كَلَيْبِ

وَكَانَ مِنْ حَدِيثِهِ أَنَّهُ كَانَ لِلْبَسُوسِ جَارٌ

彼の話に次のようなものがある。バーススのところに

مِنْ جَرَمٍ يُقَالُ لَهُ سَعْدُ بْنُ شَمْسٍ وَكَانَ لَهُ

サアド・ブン・シャムスというジャルム部族の被保護者

نَاقَةٌ يُقَالُ لَهَا سَرَابٌ¹

がいた。彼はサラービという雌ラクダを持っていた。

وَكَانَ كَلَيْبٌ قَدْ حَمَى أَرْضًا مِنْ أَرْضِ

クライブはアーリヤの地の、ある土地を立入禁止

الْعَالِيَةِ فِي أَنْفِ الرَّبِيعِ

にしていた。春先のことである。

فَلَمْ يَكُنْ يَرْعَاهُ أَحَدٌ إِلَّا إِبِلُ جَسَّاسٍ
 لِمُصَاهَرَةٍ بَيْنَهُمَا وَذَلِكَ أَنَّ جَلِيلَةَ بِنْتَ مَرَّةَ
 أُخْتِ جَسَّاسٍ كَانَتْ تَحْتَ كَلَيْبٍ
 فَخَرَجَتْ سَرَابٍ نَاقَةَ الْجَزْمِيِّ فِي إِبِلِ
 جَسَّاسٍ تَرَعَى فِي حِمَى كَلَيْبٍ
 وَنَظَرَ إِلَيْهَا كَلَيْبٌ فَأَنْكَرَهَا فَرَمَاهَا بِسَهْمٍ
 فَأَخْتَلَّ ضَرَعَهَا فَوَلَّتْ حَتَّى بَرَكَتْ بِفِنَاءِ
 صَاحِبِهَا وَضَرَعُهَا يَشْخُبُ دَمًا وَلَبَنًا
 فَلَمَّا نَظَرَ إِلَيْهَا صَرَخَ بِالذُّلِّ فَخَرَجَتْ
 جَارِيَةٌ أَلْبَسُوسٍ وَنَظَرَتْ إِلَى النَّاقَةِ
 فَلَمَّا رَأَتْ مَا بِهَا ضَرَبَتْ يَدَهَا عَلَى رَأْسِهَا
 وَنَادَتْ وَادَّاهُ ثُمَّ أَنْشَأَتْ تَقُولُ
 لَعَمْرُكَ لَوْ أَصْبَحْتُ فِي دَارِ مُنْقِذِ
 لَمَا ضِيمَ سَعْدٌ وَهُوَ جَارٌ لِأَبْيَاتِي

それでどこの家畜もそこで
 草を食べなかったが、ジャ
 ッサースのラクダは
 別であった。それは2人の
 間に姻戚関係があったか
 らで、ジャッサースの
 姉妹のジャリーラ・ビント・
 ムツラはクライブに嫁いで
 いたのである。

ジャルム部族の男の雌ラ
 クダ、サラービが出て行っ
 てジャッサースのラクダに

混じって、クライブの禁制
 地で草を食べた。

クライブはそれを見て不愉
 快に思い、矢を射た。矢は

雌ラクダの乳房を貫き、雌
 ラクダは逃げて飼い主の

庭先でうずくまった。乳房
 から血と乳をしたたらせて
 いた。

彼はそれを見て、屈辱の
 あまり叫んだ。それでバス
 ースの侍女が出てきた。

バスースは雌ラクダを見
 た。

彼女は雌ラクダに起こった
 ことを見たとき、頭を手で
 叩き

叫んだ。何たる屈辱か。そ
 して詩を詠んだ。

あなたの命に誓って、もし
 私がムンキズの家になら
 ば

私の家の被保護者である
 サアドは害を受けることは
 なかったらう

وَلَكِنِّي أَصْبَحْتُ فِي دَارِ غُرْبَةٍ

しかし私は異国の家にいる

مَتَى يَعْدُ فِيهَا الذِّئْبُ يَعْدُ عَلَى شَاتِي

そこでは狼が走るとき、私の羊を襲って走る

فِيَا سَعْدُ لَا تَغْرُرْ بِنَفْسِكَ وَأَرْتَحِلْ

サアドよ、あなたの心を欺かず、立ち去れ

فَإِنَّكَ فِي قَوْمٍ عَنِ الْجَارِ أَمْوَاتٍ

なぜならあなたは、被保護者に対し死んだように無関心な人々の中にいるから私の小さなラクダの群れを取れ、私は彼らのところから

وَدُونِكَ أَدْوَادِي فَإِنِّي عَنْهُمْ

立ち去るつもりだ 私の娘たちを彼らに害させはしない

لِرَاحِلَةٍ لَا يُفْقِدُونِي بُنْيَاتِي

ジャツサースは彼女の言葉を聞くと、彼女を黙らせ、言った。

فَلَمَّا سَمِعَ جَسَّاسٌ قَوْلَهَا سَكَتَهَا وَقَالَ

おばさん、明日ラクダが殺される、それは、あなたの

أَيُّهَا الْمَرْأَةُ لَيُقْتَلَنَّ غَدًا جَمَلٌ هُوَ أَعْظَمُ

被保護者の雌ラクダよりひどい殺され方をするだろう。

عَقْرًا مِنْ نَاقَةٍ جَارِكٍ

ジャツサースはクライブの油断を待ち続け、

وَلَمْ يَزَلْ جَسَّاسٌ يَتَوَقَّعُ غِرَّةَ كُلَيْبٍ

遂にクライブは何の怖れももたずに外出した。

حَتَّى خَرَجَ كُلَيْبٌ لَا يَخَافُ شَيْئًا

彼は外出するとき、部落から離れるのが常であった。

وَكَانَ إِذَا خَرَجَ تَبَاعَدَ عَنِ الْحَيِّ

彼(クライブ)が外出したという知らせがジャツサースに届くと、

فَبَلَغَ جَسَّاسًا خُرُوجَهُ فَخَرَجَ عَلَى فَرَسِهِ

彼は馬に乗り、槍を取った。アムル・ブン・ハーリスが彼に従った。

وَأَخَذَ رُمْحَهُ وَاتَّبَعَهُ عَمْرُو بْنُ الْحَارِثِ

فَلَمْ يُدْرِكْهُ حَتَّى طَعَنَ كُليْبًا وَدَقَّ صُلْبَهُ
ثُمَّ وَقَفَ عَلَيْهِ

ジャッサースはクライブに
追いつくやいなや、彼を突き、
背骨を砕いた。

そして彼のそばに立った。

فَقَالَ يَا جَسَّاسُ أَغْنِي بِشْرِي مَاءٍ

クライブは言った。ジャッサ
ースよ、私を助けて水を一
口飲ませてくれ

فَقَالَ جَسَّاسُ تَرَكْتَ الْمَاءَ وَرَاءَكَ

ジャッサースは言った。お
前は水を後ろに捨ててきた
(他部族から水場を取り上げてきた)

وَأَنْصَرَفَ عَنْهُ وَلَحِقَهُ عَمْرُو

そして彼のもとから去り、
アムルは彼のそばにい
た。

فَقَالَ يَا عَمْرُو أَغْنِي بِشْرِي

クライブは言った。アムル
よ、私を助けて、一口飲ま
せてくれ

فَنَزَلَ إِلَيْهِ فَأَجْهَزَ عَلَيْهِ

アムルは彼のところへ下
り、とどめを刺した。

فَضْرِبَ بِهِ الْمَثْلُ فَقِيلَ

それで彼についてたとえが
作られ、次のように言われ
た。

الْمُسْتَجِيرُ بِعَمْرٍو عِنْدَ كُرَيْتِهِ

悲しみに際してアムルに助
けを求める者は

كَالْمُسْتَجِيرِ مِنَ الرَّمْضَاءِ بِالنَّارِ

焼石を逃れて火に助けを
求める者のようだ

قَالَ وَأَقْبَلَ جَسَّاسٌ يَرْكُضُ حَتَّى هَجَمَ

語り手が言った。ジャッサ
ースは走り始め、自分の

عَلَى قَوْمِهِ فَنَظَرَ إِلَيْهِ أَبُوهُ وَرُكِبَتْهُ بِأَدْيِهِ

部族に突き進んだ。彼の
父親が彼を見たが、彼の
膝があらわになっていた。

فَقَالَ لِمَنْ حَوْلَهُ لَقَدْ أَتَاكُمْ جَسَّاسٌ بِدَاهِيَةٍ

父は周りの者に言った。ジ
ャッサースはあなたがたに
災いを持って来た。

قَالُوا وَمِنْ أَيْنَ تَعْرِفُ ذَلِكَ

彼らは言った。どうしてそ
れがわかるのか。

قَالَ لِظُهُورِ رُكْبَتِهِ فَإِنِّي لَا أَعْلَمُ أَنَّهَا بَدَتْ

彼は言った。彼の膝があらわになっているからだ。

قَبْلَ يَوْمِهَا

私は今日まで彼の膝があらわになっていたのを知らない。

ثُمَّ قَالَ مَا وَرَاءَكَ يَا جَسَّاسُ

そして言った。ジャッサーズよ、何があったのか(隠さずに言え)。

فَقَالَ وَاللَّهِ لَقَدْ طَعَنْتُ طَعْنَةً لَتَجْمَعَنَّ

彼は言った。神かけて、私はワール部族の老婆達が

مِنْهَا عَجَائِزُ وَائِلٍ رَقِصًا

踊りに集まるほどの突き方で突いてきた。

قَالَ وَمَا هِيَ تَكَلَّتْكَ أُمَّكَ

父は言った。それは何のことか、お前の母親がお前の死を悲しめばいいのに(この親不孝者め)

قَالَ قَتَلْتُ كُلِّيًّا

彼は言った。私はクライブを殺した。

قَالَ أَبُوهُ بِئْسَ لَعَمْرُ اللَّهِ مَا جَنَيْتَ عَلَيَّ

父は言った。神の命に誓って、お前は部族に対して

قَوْمِكَ

何というひどい罪を犯したのか。

فَقَالَ جَسَّاسُ

するとジャッサーズは(詩を詠んで)言った。

تَأْهَبُ عَنْكَ أَهْبَةٌ ذِي أَمْتِنَاعٍ

あなたの身を守るため防御の武器を用意せよ

فَإِنَّ الْأَمْرَ جَلٌّ عَنِ التَّلَاحِي

なぜなら事は重大で、議論している場合ではない

فَأِنِّي قَدْ جَنَيْتُ عَلَيْكَ حَرْبًا

私は戦いを引き起こすことをあえてした

تُغِصُّ الشَّيْخَ بِالْمَاءِ الْقَرَّاحِ

清水で老人を窒息させるほどの戦いを

فَأَجَابَهُ أَبُوهُ

父は彼に(詩の続きを詠んで)答えた。

فَإِنْ تَكُنْ قَدْ جَنَيْتَ عَلَيَّ حَرْبًا

たとえお前が無法にも私を戦いに巻き込んだとしても

فَلَا وَاِنْ وَلَا رَتْهُ السَّلَاحِ

私は弱者でもなく、使い古した武器でもない

سَأَلْبَسُ ثَوْبَهَا وَأَذْبُ عَنِّي

鎧を身に着け身を守るであらう

بِهَا يَوْمَ الْمَذَلَّةِ وَالْفِضَاحِ

屈辱と恥辱の日には

قَالَ ثُمَّ قَوَّضُوا الْأَبْنِيَّةَ وَجَمَعُوا النَّعَمَ

語り手は言った。そして彼らはテントを取り壊し、羊や

وَالْخَيُْولَ وَأَزْمَعُوا لِلرَّحِيلِ

馬を集めて旅立ちを決めた。

وَكَانَ هَمَّامُ بْنُ مُرَّةَ أَخُو جَسَّاسٍ نَدِيمًا

ジャツサースの兄弟ハンマーム・ブン・ムツラは、クライブ

لِمُهْلِهِ بْنِ رَبِيعَةَ أَخِي كَلَيْبِ

の兄弟ムハルヒル・ブン・ラビーアの飲み仲間だった。

فَبَعَثُوا جَارِيَةً لَهُمْ إِلَى هَمَّامٍ لِتُعَلِّمَهُ الْخَبَرَ

彼ら(ジャツサースの一族)はその知らせをハンマームに伝えるために侍女を

وَأَمَرُوهَا أَنْ تُسِرَّهُ مِنْ مُهْلِهِ

使いにやり、ムハルヒルには秘密にするよう彼女に命じた。

فَأَتَتْهُمَا الْجَارِيَةُ وَهُمَا عَلَى شَرَابِهِمَا

侍女は2人のところへ来た。2人は飲んでいる最中だった。

فَسَارَتْ هَمَّامًا بِالَّذِي كَانَ مِنَ الْأَمْرِ

彼女は起こった出来事をハンマームに密かに告げた。

فَلَمَّا رَأَى ذَلِكَ مُهْلَهُ سَأَلَ هَمَّامًا عَمَّا

ムハルヒルはそれを見ると、ハンマームに、侍女が

قَالَتِ الْجَارِيَةُ

何を言ったのか尋ねた。

وَكَانَ بَيْنَهُمَا عَهْدٌ أَنْ لَا يَكْتُمَ أَحَدُهُمَا

2人の間には互いに秘密を隠さないという約束が

صَاحِبَهُ شَيْئًا

あった。

فَقَالَ لَهُ أَخْبَرْتَنِي أَنَّ أَخِي قَتَلَ أَخَاكَ

ハンマームは彼に言った。彼女は私の兄弟があなたの兄弟を殺したと告げた。ムハルヒルは言った。あなたの兄弟は狭量でそんなことはできない。

قَالَ مُهْلِلٌ أَخُوكَ أَضِيقُ أَسْتًا مِنْ ذَلِكَ

(直訳:それをするより尻が狭い)

وَسَكَتَ هَمَامٌ وَأَقْبَلَا عَلَى شَرَابِهِمَا

ハンマームは沈黙し、2人は飲むことに専念した。

فَجَعَلَ مُهْلِلٌ يَشْرَبُ شُرْبَ الْأَمِينِ

ムハルヒルは安心しきって飲み始め、

وَهَمَامٌ يَشْرَبُ شُرْبَ الْخَائِفِ

ハンマームは怖れを抱いて飲み始めた。

فَلَمْ تَلْبَثِ الْخَمْرُ مُهْلِلًا أَنْ صَرَعَتْهُ

まもなく酒がムハルヒルを酔いつぶさせた。

فَأَنْسَلَ هَمَامٌ فَرَأَى قَوْمَهُ وَقَدْ تَحَمَّلُوا

ハンマームはこっそり出た。そして部族の者が出発

فَتَحَمَّلَ مَعَهُمْ

したのを見て、彼らと共に出発した。

وَوَظَهَرَ أَمْرُ كَلَيْبٍ فَقَالَ مُهْلِلٌ لِنِسْوَتِهِ

クライブのことが明らかになり、ムハルヒルは女達に言った。

مَا دَهَاكُنَّ قُلْنَ الْعَظِيمُ مِنَ الْأَمْرِ قَتَلَ

お前達に何がふりかかったのか。彼女らは言った。大変なことです。

جَسَّاسٌ كَلَيْبًا

ジャッサースがクライブを殺しました。

وَنَشِبَ الشَّرُّ بَيْنَ تَغْلِبَ وَبَكْرِ أَرْبَعِينَ
سَنَةً كُلُّهَا يَكُونُ لِتَغْلِبَ عَلَى بَكْرِ
وَكَانَ الْحَارِثُ بْنُ عَبَادِ الْبَكْرِيِّ قَدْ اِعْتَزَلَ
الْقَوْمَ

タグリブ部族とバクル部族
の間に災いが勃発し、40
年続いて

その間ずっとタグリブ部族
がバクル部族に対して優
勢だった。

バクル部族のハーリス・ブ
ン・ウバードは部族から

孤立していた。

فَلَمَّا اسْتَحَرَّ الْقَتْلُ فِي بَكْرِ اجْتَمَعُوا إِلَيْهِ
وَقَالُوا قَدْ فَنَى قَوْمُكَ

バクル部族で死者が数多
くなったとき、彼らはハーリ
スのもとに集まり、

言った。あなたの部族が滅
びてしまう。

فَأَرْسَلَ إِلَى مُهْلِلِ بُجَيْرًا ابْنَهُ وَقَالَ
قُلْ لَهُ أَبُو بُجَيْرٍ يُقْرِئُكَ السَّلَامَ وَيَقُولُ لَكَ
قَدْ عَلِمْتَ أَنِّي اِعْتَزَلْتُ قَوْمِي لِأَنَّهُمْ
ظَلَمُواكَ وَخَلَّيْتُكَ وَإِيَّاهُمْ

そこで彼はムハルヒルのと
ころに息子のブジャイルを
使いに出し、言った。

彼に言いなさい。ブジャイ
ルの父はあなたに挨拶を
送り次のように言っている
あなたは私が部族から孤
立したのを知っているでし
ょう、なぜなら彼らは

あなたに無謀を行ったから
です。私はあなたにも彼ら
にも干渉しませんでした。

あなたは既に復讐を遂げ
ました。私は神かけてあな
たの部族と話し合っ

くださるよう、あなたにお願
いします。ブジャイルは、
部族を率いていたムハル

وَقَدْ اَدْرَكْتَ وَتَرَكْتَ فَاَنْشُدُكَ اَللّٰهُ فِي قَوْمِكَ
فَاتَى بُجَيْرٌ مُهْلِلًا وَهُوَ فِي قَوْمِهِ فَاَبْلَغَهُ
الرِّسَالَةَ

ヒルのところに来て、伝言
を伝えた。

فَقَالَ مَنْ أَنْتَ يَا غَلَامُ

ムハルヒルは言った。少年
よ、お前は誰だ。

قَالَ بُجَيْرُ بْنُ الْحَارِثِ بْنِ عَبَادٍ

فَقَتَلَهُ ثُمَّ قَالَ بُوٌّ بِشِئْنِ كَلْبِ

فَلَمَّا بَلَغَ الْحَارِثُ فِعْلَهُ قَالَ نِعْمَ الْقَتِيلُ

بُجَيْرٌ إِنْ أَصْلَحَ بَيْنَ هَذَيْنِ الْغَارَيْنِ قَتَلَهُ

وَسَكَنتِ الْحَرْبُ بِهِ

وَكَانَ الْحَارِثُ مِنْ أَحْلَمِ النَّاسِ فِي زَمَانِهِ

فَقِيلَ لَهُ إِنْ مُهْلِهَلَا قَالَ لَهُ حِينَ قَتَلَهُ بُوٌّ

بِشِئْنِ كَلْبِ

فَلَمَّا سَمِعَ هَذَا خَرَجَ مَعَ بَنِي بَكْرِ مُقَاتِلًا

مُهْلِهَلَا وَبَنِي تَغْلِبَ ثَائِرًا بِبُجَيْرِ

وَأَنْشَأَ يَقُولُ

قَرَّبًا مَرْبِطَ النَّعَامَةِ مِنِّي

إِنَّ بَيْعَ الْكَرِيمِ بِالشِّئْنِ غَالِي

彼は言った。ハーリス・ブ
ン・ウバードの子ブジャイル
です。

するとムハルヒルは彼を殺
して言った。クライブの靴
ひもの代償となれ。

彼のしたことがハーリスに
伝わると、ハーリスは言っ
た。

ブジャイルは何と立派に死
んだことか、彼の死でこの

二つの軍が調停され、戦
いが収まったとしたなら。

ハーリスはその時代の最
も寛大な人物の1人だっ
た。

しかし、ムハルヒルがブジ
ヤイルを殺したときに、クラ
イブの靴ひもの代償と

なれと言ったことを聞かさ
れた。

これを聞くと彼はバクル部
族の者達と共に出かけた。
ムハルヒルやタグリブ
部族の

者達と戦い、ブジャイルの
復讐をするために。

そして詩を詠んだ。

私をナアーマの馬小屋に
近づけよ

高貴な人は靴ひもで売る
には高すぎる

قَرَّبَا مَرْبِطَ النَّعَامَةِ مِنِّي

私をナアーマの馬小屋に
近づけよ

لَقِحَتْ حَرْبٌ وَائِلٌ عَنِ حِيَالِ

不毛の後にワール部族
同士の戦いが災いをはら
んだ (タグリブとバクルはどちら
もワール部族の支族)

لَمْ أَكُنْ مِنْ جُنَاتِهَا عِلْمَ اللَّهِ⁴

私は(戦いの)罪を犯して
いない、神がご存じだ

وَإِنِّي بِشَرِّهَا أَلْيَوْمَ صَالِي

私は今日、災いのために
やけどをしただけである

وَيُرْوَى بِحَرِّهَا

一説には**بشرها** (災いのた
め)ではなく**بحرها** (熱のた
めに)と伝えられる。

وَالنَّعَامَةُ فَرَسٌ الْحَارِثِ وَكَانَ يُقَالُ

「ナアーマ」はハーリスの
馬で、彼はナアーマに乗る

فَارِسُ النَّعَامَةِ

人と呼ばれていた。

ثُمَّ جَمَعَ قَوْمَهُ وَالْتَقَى وَبَنُو تَغْلِبَ عَلَى

そして彼は部族を集め、彼
とタグリブ部族はキダと言
われる山で

جَبَلٍ يُقَالُ قِضَةُ فَهَزَمَهُمْ وَقَتَلَهُمْ وَلَمْ

遭遇し、彼は彼らを敗走さ
せ、彼らを殺した。彼らは

يَقُومُوا لِبَكْرِ بَعْدَهَا

その後、バクル部族に対
抗できなかった。

1 この固有名詞は格変化せず常に**سَرَابٍ** である。

2 **تَكُنُّ** の**ن** が省略されたもの

3 完了形は**باء**

4 **اللَّهِ** の**هُ** は下半句になる。